

いかいふと心見に 返しを
 玄めゆひし 玄めゆひたてし萩が花の色はうつろひま
 よふともなきに下葉はいかなる露に色のうつろへる
 と云てまづ契りおきたる浮舟の方はことなる事もな
 くて有るをいかにしていもうとにはうつりけん也
 こはしがうへも 子をそへたり
 いとはしく 少將のさすがに
 宮木の、 故宮の子といひよせたり故八宮の御子とい
 ふ事を知りたらばいさゝかも心を外へうつさである
 べかりしをとなり
 みづから聞えさせ 後に宮の御子のよし聞しよなどい
 はんとなるべし
 思ふに 北方の
 いといかで 故宮の御子と人の知なればいとしく
 いかでよき人なみにうき舟をあらせばやと思ふにつ
 けて大將殿の御さまのいよゝ戀しきなり
 人とひとしくとのみ 中君にいとおとらざらん事を思
 ふなるべし
 宮は思ひはなれ 是も北方の心なり
 この君 大將

いたけれ 北方の心痛なり
 わかき人は 浮舟をいふ
 わが物にせんと かくにくき少將をわが智にせんと思
 ひしこそをさなかりきもし智と成りてあらばさも見
 ぐるしかるべしと今は思ふなり
 べかりけれなど この語によるに上のこそは句なり
 たゞ心に 浮舟の事の
 とてやかくてやと 左してやよからん右してやよから
 んとなり
 いとかたし 薫にと思ふがかたきなり
 やんごとなき 薫の様をいふ
 みたてまつり 薫の
 いますこし 皇女なるを云
 いかばかり 浮舟には
 この君 浮舟
 たびのやどりは 三條の宿にて浮舟
 宮のうへの 中君
 あやにく 匂宮
 なにごとにか そのとらへ給ひし時
 は、君だつやと 或説今までは浮舟を主などの様にあ

しらひしかと浮舟のかく使ひなければ中々母めくぞ
 たのもしからんとて衰れにおやめきて文を書きたる
 てふ意かといへど猶さ有るべうもなしこゝには字の
 落ちたるか又はあやまれるか考ふべし
 おろかならず 浮舟の思ふ
 心ぐるしう 母の
 あつかはれ奉るごとく 我身を母のもてあつかふなり
 いかにつれと 母よりの文
 ひたぶるに こゝの心やすきによりて思へばさきく
 のたまひし世の外の住居せば尙ひたすらによからん
 と云て母のおもひをやすめんとするなり
 をさなげに 末の事をよくもおもひやらでひたぶるに
 云ふがをさなしとなり
 ほろくしと かく宜ふにつけてもかなしければ
 うき世には 今はかゝる所にはふらし置けとも又世の
 外の山住をせさせ侍るとも猶君をば一度さかえさせ
 て見るよしを思ふとなり
 なほくしき これは思ふ心をありのまゝによめるを
 此記者はまだしと思へるにや凡此記者今めく心のみ
 有りて歌などはよくも侍らすかくいゝつこそ人もあ

はれとおもはるゝをや
 ならひにしことなれば 前々秋に宇治に有し事なり
 物忘れせず 大君を
 こたみは あたらしく作るべきと前にありし
 むかしいとことそぎて 故宮の
 さまかへて もとの玄んでんを作りかへたるなり
 いとたうとげにて うばそくの宮のおはせる方は佛な
 どするん料なるを云
 女しく 姫君達の料
 そうぼうのぐ 僧坊の具
 山里めきたる あじろ屏風即ち山里の具なれど夫らは
 あらくしければ其類をば僧坊へわたしてこなたの
 玄ん殿には同じ山里ぶりしたる具ながらあらくし
 からぬさまにこと更に作らせて有りぬべき具どもは
 さのみ略かす作りそなへ給ふといふなるべし
 ことさらに 其あらくしき具どものかほりを
 せさせ給ひて 作なり
 たへはてぬ 水はたえはてす有るをいかで昔人の儆を
 だに其水にとめす有りけんとなり
 おもかげをだに 水には影のみゆる物なればなり

いとかなしと 尼は
たゞひそみに なかんとする時の口つきなり
なげくに 薫

几帳にかくろへて 尼
かの人は 浮舟
宮にと聞きしを 中君の方

こゝかしこになん 二條に渡して又三條へうつりつる
を先づいふなり

あくがれ給ふめる 浮舟を母のいふなり
こ家に 三條

心ぐるしく 北方の
そこにも渡して 北方の文の語にてそことは此宇治な

り
人々の 薫のゝたまふ

ふりがたく 此ふりは思ひふるしかねてなり
何ばかりの 是は大君の契は年月多くもあらでうせに

しをいふなるべし
その心やすからん 三條の小家
みづからやは 尼の出給へかしとなり

かたごのひじり むかし楠本紀僧正眞濟愛宕山にこも

りたりしを嵯峨の御時めて内供とし給ひ空也上人
も此山にこもりて後に京に出て念佛の行をほどこせ
し事など有るをいふといふ説有りそれらの事を本と
してかくはのたまふなるべし

人のねがひを 我願ふ浮舟の事をとるもかの僧の世人
をわたすにひとしとなり

人わたす事も 右の事をうけて我は濟度する筋ならで
都に出ばよからずいひなさるゝ事も出でこんか也

なほよきをりなるをと 小家にはなれる給ふをいふ
其たびの所 浮舟の旅居の筋

ゆめ 誤てなり
御心ざま 薫の

さらばうけ給はりぬ 薫の御みづからの爲め
御文などを 近きほどには上のあさて車給はらん時に

と云意なりさて其時浮舟への御けさうぶみ御歌など
をこゝへ給はらんなりそれをもて我れかなたへ行て
申さんとなり或説は誤れり

ふりはへ 御文なくては尼が意有りてわざくさかし
らに京へ出て事とる様に見えんはつましきとなり
いがたうめ 此は伊賀部の事といふ女のさかしらに人

の媒してさしられたる古き物語などに有らんをいふ
成べしさてたうめは和名抄に専太字女今呼ニ老女ニ爲ニ

太字女といひ土佐日記にもあはちのたうめてふ女
あり然るをたうめは媒をいふと云説は此文の意を直

に意得そこなひたるものなり
其かむのぬし ひたちのかみなり
うちわらひて 尼

いとほしと思ふ 浮舟のさ様の所におはせしをいとほ
しむなり

くらうなれば 薫の宇治の宮より
またくさの 秋の草の花なり木にむかへて下草といふ

宮に 女二なり
かひなからず 女二の御さま

かしこまりおきたるさまにて 薫の
いたうも ふかく御心にしまぬなり
うちより みかどよりなり

入道の宮にも 女三
聞え給へば 女二を御頼み

思ひ聞え給へり 薫の
宮さかへ みかども御母宮もかしづき給ふ女二にませ

ば薫は女二に宮づかへの様におぼして心わづらはし
きに打そへて私に浮舟をとりあつかふが心ぐるしき
となり

のたまひし日 あさでと有し日の朝まだきなり
御さうの 宇治の宮近き所の
つけよとのたまふ かの車に

かならず 尼へ
いづべく 京へ

つましく 尼は
いにしへよりの 宇治より京へ出る間の野山に今此尼

君の思はん古こと有べきにやされと思ひ出られてな
がめくられてしといふによるにたゞ大君につきてかを
るの通ひ給ひし程の事と思ふなるべし

きつきける 三條に
いとつれなく 三條の家

ひきいれて 車
まるべのをのこして 尼のぐしたる男の此方のものに

まるべ有るなるべし
初瀬のともに 前々にみゆ

あやしき 浮舟

親と聞えける 故宮を云

世中かばかり思ひ給へすてたる かく尼となりてなり

かのみやにだに 中君の方

君もめのとも 浮舟

人の 大將殿

たばかりらんとは たゞ思ひはかるにて後人のたばかり

ると云とはことなり

さにやあらんと 大將殿にや

辨あけさせ 尼

あやしと めのとは

御庄のあづかりの 大將殿とはいはで前につけさせよ

と有りし御庄の預りが名をのらせたるなり

とぐちに 尼は

かうなりけりと 是大將ぞとなり

御けはひ 薫の様を云

よういもなく 此方女ぼうの云

いかなることにか 常の係想ともおぼえずいかなる事

にて渡り給ふといふかしむなり

心やすき 薫のたまふ

いかに聞ゆべきことにかと 浮舟母君のおはさねばい

かにしてよからんとなり

かのとのに 北方の方へなり

うひくしく 尼のいふ

さはあらん 北方へいふべき事はとなり

君なれば 薫なり

やかの家を古へよりいへども又やかともやけともい

ひしは御宅 家持 家族などの類なりさてこゝは其家

のたつみの方の角にやぶれ崩れたる所有るがぬす人

をさせとなり伊勢物語なるはついちの崩なりこゝは

ついちにはあらで家の角のくづれなり

御車いるべくは 門の内へ入るべきならば引入れよと

いふなり

かゝる人のとも人 かゝるとも人にこと様の意有るが

あるならひなれば人ははやく出して車のみ入れて御

門とちよと也とも人は立かへるぞ常のことなれば也

うたて 異様なりと云なり

むくくしく 薫のおはす所近く聞え且る中人のかく

あらくしきを聞ならばぬ御心にもあり

さのゝわたりに 万葉に「くるしくもふりくる雨か三

わが崎このゝわたりに家もあらなくに

さとびたるすのこの 都なから家の様にはことなれば

里ぶりたるなり

さしとむる 菘など生かさなれる宿には雨のまづくも

えはやくはおちはてねば雨そゝぎも久しく落るを以

て久しくすのこにまたせ奉るを内へさへとむる人

有るにやとそへたり歌の語はさいばらにあづまやの

まやのあまりの雨そゝぎわれ立ぬれぬ此戸ひらかせ

といふによりあまりは家のつまをいふ

いとかたはなるまで 餘りに有事をいふ

とぎまかうさま 左右おもひはからへどなり

心やすくも 浮舟は

やり戸といふもの よきあたりにはひさしの外は格子

にてひさしともやのへだては多くは簾なりこゝは里

めく家にてそのへだてにやり戸をしたれば其戸を少

しあけて女君はたいめしたるなりよりてひだの工が

やり戸を作りてへだてとせしがうらめしきと薫のゝ

給へり且薫などはよし物へだつとも簾の帳などこそ

あれやり戸へだてゝ人にあひ給ひしことなしとうれ

へ給へり○昔の匠は只飛騨國より出たれば工をばす

べてひだたくみといへり令式などに委しくみゆれば

はぶけり

いさゝかあけたれば 人の内へ入るまじきほど少し明

置たるなり

ひだのたくみも 薫のたまふ

物のとには 外

いかやし給ひけん 薫のえ入り給ふまじきほどに明し

戸をいかしてあけて入り給ひけんとなり

いり給ひぬ 内へ

かの人がたの 大君の形見の事前に有

ねがひものたまはで 今かくのたまひては中々に浮舟

に心淺き様なるを思給ふか 宇治にておもひがけず

なり

おぼえなきものはさまより 宇治にておもひがけず

さるべきにや 宿世

給ふべき らんといふがごとし

人のさま 浮舟をいふ

見おとりもせず 薫の

ほどもなう 秋の夜も逢人がら短きよしなり

おほどれたる ねおびれたると云に同じ

聞も去らぬなのり 物うる賤がその物のなのりして行くなりむかしも朝まだきより弊たてゝうりありきしなるべし

かしこに 宇治 人ひとりや 浮舟の御ともに 侍従とのりぬ 辨の尼と二人なり

をにのやうなる 大路などのあさぼらげに物いたゞき

めのと 浮舟の

て行きかふ賤女が様は鬼の様なりと人の申せしを聞

おくれて 残り居なり

給ひしにかのなのりして行くはさるもの共ならんと

うしなどひきかふべき 路遠ければかけ替ふべき牛を

おぼすとたり

も引くなり

よもぎのまろね 蓬生の宿なり

ほうざう寺 法性寺は眞信公たてらる

おのゝいりてふしなどする 是はかの夜行の人の臥

わかき人は 侍従なり

しなり

み奉りて 薫を

かきいだきて 浮舟を

君ぞ 浮舟

九月にも 九月はかゝる事をむかしはいみじといへり

ほそながを車のなかに 花鳥に男をんなのるとき或

なが月はあすこそ けふはまだ九月の節にいらぬなり

は物見などの時前の簾をあくるによりて車の中に儿

せちぶと 節分

帳の帷をかくるなり時としては細長もかくべきにや

宮のうへ 尼の京へ出し事を中君の

と又或説に車の内に鈎有るはかゝる物をかけん料なり

玄のびて 宮へは参らで

朝日かげに うす物のへだてのみにて朝日に内あらは

いとうたて 異様

なるを女君はうつぶしたるが尼はさもせねばはした

まだき 中君へ

なき成るべし

心はづかしく 薫の つみさり申 其ことわり申さけてんなり

故姫君の 大君の

御ともに 薫のかたへ渡り給はん

有ふれば ながらへて

物のはじめに 此時さまぐわろき辭の有るなり

かたちことにて 尼のいとゞいよゝしきになり

おろそかに 大君の事は侍従は去らねばたゞ凡の事に

思ふなり

と見るにつけていと泪の深きとなり夫に此女君をか

君も 薫 見る人は 浮舟をいふ

の御形見と見る心をもそへし成るべしさて總角の卷

雲のけしき むかし通ひし時のけしきに似たるならん

に大君の喪に薫のこもり給へる時限りあれば御ぞの

きり立わたる なげく心のくらく成るなり

いろのかはらぬを中略「紅に落る泪もかひ無はかた

御ぞの紅なるに 大将なれど若うおほすれば二藍の直

みのいろを染ぬなりけりゆるし色の氷とけぬると見

衣なるべしきて霧にふかくぬれて下の紅の色うへ

ゆるをいとゞ鳴ぬらしそへつゝと有をこゝにむかへ

にうつりて甚しく血の涙にぬれたらん袖の如く見え

て書ける成るべし

しといふならんおどろしくといへばなり

わかれも 薫の

御なほしの花の 九月にてまた夏の直衣なり

うちかみて はなかむもなく時なり

おどろしくうつりたるを 下の御衣の紅

いかゞ思ふ 浮舟は

おとしかけ 道のひくゝおちたる所より急に高き所へ

さしかくして 扇なり

車を引きのぼる時は居なほるにつけて御袖のたれし

おほどきすぎ 心さねのたしかならぬ故に終にこと出

を見つけ給へるなるべし

來たり 大君は

かたみぞと 此ぬれうつろへる袖を大君の喪の時の色いといたう

ゆく方なき 思ひをやる方無なり古今「我戀はむなし

有さまは 新しき寝殿なり

き空にみちぬらし思ひやれども行くかたのなき

山の色ももてはやし 川をも山をも見るによろしく作

おはしつきて 宇治の宮に

られしなり

なき玉やゝどりて 大君の魂や猶此宮に

日頃の 三條の小家

たれによりてかくすゝろに かくこと女をいなざひ來

いかにもてない 此末

るもたゞ大君の形見とてこそなり

とのは 大將殿

おりて 車

物いみなりける 此をり

心惹らひて 大君の魂のおぼさんことを思ひて少し立

は、宮にも 女三

さり給ふが禮の心なり浮舟の打休み給ふべきためと

うちとけたる 浮舟の車の内よりは打とけて見ゆるを

云説あれど上の語にかなはず

いふなり是を蕪のうちとけたるといへる説は次の文

女は 浮舟

にたがふ所あり其上男ははじめよりつゝましようする

えんなるさまに 蕪の

物にあらず

らうにそ 廊

をかしく 蕪の心に

わざと思ふべき 蕪のおぼすなり専らと浮舟の住べき

よくと思ひてしかさねたれど 蕪の

所ともなくかりその事なるを尼の用意あまりなり

むかしのいとなえばみたりし 北方のかねてせしなり

と蕪のおぼすなり

かみのすその 浮舟の髪は大君よりもまされるなり

女の御たいは 浮舟

宮の 女二

あま君のかたより 蕪の女をぐし給ふを忍びたる故な

此人を 浮舟をなり

り 木の下道なりしなり

か

かの宮に 女三の方

これかれあるつらにて つかふる人なみ

おほぞうに そのきはもなく

是は少し 東にて生立し人なればあづまごとは少しは

みずはさうくしかるべく 常には通ひがたき故に

弾給ひたりやと戯れてのたふなり一本にわがつま

おろかならず 今去ばし有てよろしう物みせん此世な

といふ事とあれど猶たゞあづまと有るぞよき

らぬ御契など成るべし

さりとてならし 東そだちなれば

こ宮の 八宮

其やまことばだに 女君のこたへなり やまとのこ

あやまりても 餘りに物はち過たる人を見初しは我思

とばをだに去るよしなくて年へたればましてあづま

損ひなりとも猶教へばよくもなりなんもし又の中ひ

の事は去らずとなりあづま琴を本やまと琴といへれ

たるざれ心ならんにはいと無益ならましをとなり

ば夫れによりて大和ことばてふこたへは出たり

ふようならましと 不益

いとかたはに 此こたへを聞給ひて

きんさうのこと 琴箏

こゝに置ても 宇治になり

ましてえせじかしと 田舎そだちなれば

楚王の 文集に班女聞中秋扇色、楚王臺上夜琴聲是は

宮うせ給ひて 故八宮

浮舟の白き扇をも給へるにつきて蕪のふとなへ給

宮の御きんの下 故宮の

ひしを此人々事の心惹らばとがむべきをたやめで聞

誰もく 宮も姫君だちも

ゆるはおくれたる人なりかしとなりさて蕪の不祥事

などで いかでゐ中にはなり

を唱へたりしとみづから悔給へりかの班女は漢の帝

白きあふぎを 下に班女が扇色の事をいはん料なり

の瀧おとろへて後に秋扇のことばを作りしなり

いとよく思ひ出られて 大君を

いとめでたく 今蕪の様

まいてかやうの 上に心もとなきをば教へつゝもと有

いひつるかな 此詩を

しきたるかみに くだ物の下になり
 ふつやかに 尾君老たれば字をふとく歌を書しなるべ
 しふつやかとはたくましくふときをいへり
 くだものいそぎ かの書たる物にめをとめ給ふをく
 だ物にめをつくる様に見ゆると戯れて書けり
 やどり木は 前の巻にやどりぎと思ひ出すは木のもと
 の云々と薫のよみ給ひしをうけてさてその木の葉の
 色かはるによせて大君と浮舟とかはれどもやどり給
 ふは同じ薫なればむかしの覚えらるゝとなり
 はづかしくも 大君の形見の人とはいへどもさすがに
 又人にあふは此尾にはづかしきなり
 里の名も 或説のごとくならば今やどれる宇治てふ里
 もむかしなれど逢見る人のかはれば月もおもかはり
 て見ゆるといふ歎されど里の名もといふこと今少し
 穩ならず別に古歌などによりたるにや考ふべし
 わざとかへりごとゝは くだ物の紙に有て薫にまゐる
 ともあらねば御こたへもかく有るか

源氏物語新釋

浮舟

此巻の名は「たち花の小島はいろもかはらじを此浮
 舟ぞよるべしられぬてふ歌により薫大將廿六の歳
 のむ月よりやよひの末までの事なり前のあづまやに
 こぞの九月まで有りて冬の事はふきたるなり
 みやなほ 匂宮
 かのほのかなりし夕を 浮舟にかたらし給ひし事なり
 ことく敷程には 浮舟のさまを匂のおぼす
 まめやかに まことにといはんがごとし
 あだなる御心は 匂の
 女君をも 中君
 かうはかなき かくばかりかりそめのけさうなるにも
 強て物ねたみして此女を外へおひまどはし給へりと
 宮の恨み給ふなり
 おもはずに おもひの外になり
 いとくるしくて 中君の
 ありのまゝにや 浮舟は薫の契り有ることを
 やんごとなきさまには 薫の此人を

あさはかならぬかたに されど又
 人のかくしおき給へる人を 薫
 さて聞過し給ふべき 薫の宣ひ置し事を匂へあかしい
 ふとも匂はたゞに聞過して有るべき御本性ならねば
 とかくもとめなどしてたが爲にもあしかりぬべけれ
 ばよしおのづからはゑらるゝともわが口づからはい
 ひ出でじとなり
 さぶらふ人の 仕る女房たちを云
 月日をへて 浮舟はことには匂の御心のとまれりと見
 ゆれば
 いづかたさまにも 浮舟の爲かをるの爲にも
 ふせぐべき人の かゝはらぬ匂の御心となり
 よその人よりは 匂の浮舟の事なればなり
 聞にくゝなどばかりぞ のみと云に同じ
 わがおこたりにて 宮はよしわがねたみとおぼすばか
 りはさても有りなん事出来なばわが心のおこたりよ
 り出ここに成るべければとなり
 いとほしながら 宮の御心は
 ことさまに 宮へは空ごとをつきくしくもいひのが
 るべきなれどさるそらごとなどはえいひ得給はねば

世のなみ／＼の物ねたみ人になりておはすと
 かの人は 薫なり
 神のいさむるよりも 萬葉九筑波山爲躍歌に此山をう
 しはく神の昔より不しん禁ぎんわざぞ云々伊勢物語に戀しく
 ば來ても見よかしちはやふる神のいさむる道ならな
 くにはらを以て其神の禁ぎんんよりも世にはゝかるにわ
 りなきなりと打かへして書けり
 山里のなぐさめと 先は山里のなぐさめとおもひ定め
 しからはなり
 すこし日敷も 宇治になり
 さて去ばしは人のゑるまじき住所して 三條の宮近き
 所へわたさんと下に見ゆ
 かの心をも 浮舟のなり
 はじめの心にたがふべし 初め道心深くて女に心よせ
 ざりしなり
 又宮の御方の 浮舟をめでて大君の事は忘れしよと中
 君のおぼさんとなり
 すこしいとまなきやうにも 女二に心置て浮舟の事を
 はかりなどし給ふを云べし
 宮の御方には 中君へはなり

見奉る人 薫の餘りにたへぬ御心よせを外めにはいか
 が下の心も有りやなど思ふほどなれど中君今は世の
 有りさまを知り給ふにつけて此御心のまめなるを知
 るとなり
 人の有さまを見聞給まゝに 世の人の頼みがたき事を
 これこそは 薫こそはなり
 むかしを忘れぬ 故宮又大君をわすれぬ餘りに我をも
 むつむとなり
 ねびまさり給ふまゝに 薫の様
 宮の御心 匂
 二姫君のおぼしおきてしまゝにもあらで 我を薫にと
 とし月も 宇治にて有しむつびは多く年をへだてたる
 なり
 うち／＼の御心も 右にも前々にもみゆ
 さばかりのゆかり 遠く久しきゆかりなり
 なか／＼かうかぎりある程に 皆やんごとなきどちと
 いひ又ともに夫婦の定まれゝばなどなり
 さりとてもたえず 中君よりはとほく成行けど猶薫は
 心かはらず問給ふなり
 みやもあだなる 匂なり

外にはかゝる人も 六君などをいふ
 やんごとなきものに 中君を御子有るにつけて
 物思ひまづまりて 中君
 わたり給て 宮の中君の方へ
 あうなくはしり参る 奥なくにて前にも有し
 大輔のおとゝにとて 某殿といふを何のおとゝと云前
 にもあり宇治よりの使の此御文など大輔にわたさん
 とていひ入んにをりふし人なくて使のもてわづらひ
 てゐたるをかかさしら童の見ていつも宇治よりの
 御文などは中君の御前に御らんする故にとて取ても
 て参りたりとわらはのいふなり
 いとあはたしき 此童のさまなり
 このこは 此籠
 色どりたる 或説金にてこを作りて録青にていろどり
 たるなるべしといふ
 ゑみていひつゝくれば 童の
 みやも 匂の
 もてはやしてんとめす わらはのめづるにつけて我も
 云々となり
 御かほあかみたれば 女君の

それならん時にと 大將のならん時はとなり
 あけて見んよ ふともひらきかねての給ふなり
 ゑんじやし給はんと 女君の
 みぐるしう 中君のゝ給ふ
 さはみんと 宮さらば見んとなり
 おぼつかなくて 浮舟の文ことばなり久しく御使もあ
 らでとなり
 山さどのいぶせさ 古今「山かくす春の霞ぞうらめし
 きいづれ都のさかひなるらん」都人いかにとゝは
 山高みはれぬ雲ゐにわぶとこたへよこれらをかねて
 書きしなり
 おぼしなきを 誰ならんと
 としあらたまりて 右近が大輔への文のことば
 めでたき御すまひの 或説云薫のかくすゑおき給ふは
 めでたき事ながら絶間遠くて且山ふところなればふ
 さはしからぬとなり
 かくてのみ 浮舟の
 わたり 二條院へ
 おそろしきものに 過し夕宮の御ふるまひをなり
 うづち 正月上卯日に御杖献る事は紀にも見え

たり卯槌は江次第に春宮被^レ献^ニ卯杖^ニ大進著^ニ腋陣^ニ付^レ藏人進^ニ之次大舍人進^ニ卯槌^ニとあれば中頃よりは
じまれるにや

おほき御まへの 故宮を申せり
こといみも 年の初めなれど
御らんじて 宮の

むかしかの山里に 中君こたへ
ありける人の 故宮の時つかへてなり
かしこに 宇治に

おぼしあはせつ かの夕くれの人なりと
たまふりに 和名抄に櫻榎^{和名}とよみて木のまたなり
といへり右にいふごとく卯杖と同じく献る物にてこ

この様をかね思ふにまた有木の枝の末を結て其中ら
へかの杖さしつらぬきて榎のごとく作る成るべし
て山橋を別に作りてその杖に添へてまたぶりに同じ
くつらぬきたるなり
またぶりに山橋 是は次の語へつゝくなりまたぶりに
山橋を作りそへたりと云説はわろし
そへたるえだに またぶりをつらぬく木の枝をいふ
まだぶりに またぶりをかくせりまた年ふらぬ木なが
らうじ給 願

いとほしく 宮の心
尼は 大内記いふ
今たてられたる かの新しきまん殿なり
いとけしきありて 薫の様を云
ふるさとに 宇治のむかしの名残を思ふと人のいひし
はなり

此人は 大内記
御心のうちには 匂
心をかはして 薫も中君と
のり号 正月十八日
内えん 同廿一日
御心にいらん 匂の
かたき事成りとも 匂の内記にのたまふ
るねの時 亥子
さかし 匂
人のために 薫をいふ
おぼしいづること 前に薫の中君を媒せし事
やゝましけれど 或説に心やましきなり
聞たりければ 聞置しなり
我もさすがに 内記も

ら君が爲に下とせを待つと知給へとなり或説の如く
まだ手ふれぬ事といひては末の語聞えずさて山橋は
ちいさき物にてときはなれば此末の榮を待つといは
んとて添へしなり深き心とはまたぶりにつらぬきた
るもふかきといはん料なり且右に籠を小松に付けた
るもこの歌を助けんとて成るべし

返事し給へ 匂の^レ給ふ
なさけなし かへりなくては
御氣しきのあしき 中君のことを宮の^レ給ふ
いとほしくも 浮舟のため
み給へましかば 少將など申
あなかま 中君

はらたてそ なほらだてしかりそといふ意成るべし
わが御方に 宮
大將の 薫

いとあまりなる人のかたみとて 餘りなるまで玄たひ
給ふ大君の形見なりとていかゞにぞやとなり
御文の事につけて 物學び給ふをいふ
いかめしく 大内記

いすは 山ざとめきたるなり
物ぬふ人 石山詣とて京へ出んとする料なり其よし下
に見ゆ
かのほかげに見給ひし 二條院にて
たいの御かたに 中君
ものをるとて 折
いらへもせず 浮舟
はひかくれさせ 浮舟 物まうであらまし有なり
むかひたる人 又こと女がいふ
御せうそこ 薫へ
御物まうでの後は 石山
やがていたり 石山より即うぢへ
かくて 宇治は
なか^レ旅々心ちすべし 京の故郷は
又あるは 又一人なり
かくて待聞えさせ 薫のむかへ給はんを待給へ御むか
へ有て後北方にも逢給ふぞよからんとなり是による
に石山詣をことばにて北方に逢給はんの心なりけり
おやにも 母北方
このおと^レ 是はめのとをいふと見ゆさてめのとが京

へ出給はん事をそのかしたるなり

ものねんじて 物を念じて城へ去のぶをいふ

このまゝを 或説にまゝとはめのとが名なりさて前に 御くるまは 北方より御迎の

めのとが京へ出る事をとめ給は北方にこれかれ 思ておきて出たり 右近が

いひて君を京へ出給へなどいふ事はあらじをいかで あやしくおぼえなき 右近

か浮舟のとめ奉らざりけんとなり 物のへわたり 句の

げにゝくきものありきかした 勾宮かの夕ぐれにおそ なかのぶ 薫の家司にて大藏大輔仲信なりといへり

ろしげに見えしおふなをおぼし出給ふなり いとようまねびにせて 薫の物いひを

左の大とのが 六君を云 志のびたれば 志のびやかにの給へるを云か

わが君 中君に 思ひもよらず 右近

かゝるさかしら人 かゝるめのとなどの無くてなり かいはなつ 戸のかけがねをはなつなり

殿だに 薫 おそろしき事の おひはぎにあひつるとなり

きみ少し起あがりて 浮舟 いとらうくしき御心は 功勞

何ばかりの 句のおぼす われも 右近

しぞく 親族 ちかうよりて 浮舟のね給ふ所へ

なりあはぬ所を たとひもし浮舟によろしからぬ所を 御ふすまゝありて 右近がきせ奉りてなり

見付給ひてだにとなり ねつる人々おこして 御傍にねつる人なり

御心ならねば 句の れのこゝには 或説薫の御ともの人々はいつも尼君

又心も空に 異本にわななくおぼしまどひぬ物へ行へ の方へ行てあれば此御方の女房たちは去らずよりて

きなかりおやはあるべしいかでこゝならで又はたぐ 御供につけてあやしまぬなり

おはれたる夜のおはしとほし様哉 今夜はことに薫の御

心深うおはし様なりと女ばうのいひあへるなり 誠にしぬべく 古今「戀しとはたが名づけゝることな

御らんじ去らぬよなど 女君は是をおぼし去り給はで らん去ぬとぞたゞにいふべかりける

京へなどおぼすと云なり いとこゝちなしと 餘りにおもひやりなしと云意か

あなかま 右近 をのこども 御とも

あらの人なりけりと 薫にあらぬとなり 時方は 或説勾宮家司出雲權守

聲をだにせさせ給はず 聲を句のたてさせ給はぬなり 山寺にしのびて 句の御歸りの時までは

いとつゝましかりし所にて 二條院にて有し夕の事な あさましく こゝにて勾宮と知りて

り此あたりの文は落着を先いふなり 心もなかりける 句とは少も心つかざりしなり

御心なれば 句の なめげなり かひも無きが上に宮に禮なしとなり

いさゝかいふかひもあるべきを 少しせん様も有るべ あやしかりし 二條院にて

きをとなり 人のしたるわざかはと 宿世のなす事となり

その折のつらかりしこと 二條院にて句のゝ給ふなり けふ御むかへ 京より

かのうへ 中君 又たけきことなければ 中君へも薫へも其外にも此宮 いとさこえさせ侍らんかたなし いはんすべなしとな

にあひては皆わろきのみなるをいふなり いでおはしまして 句の

中々にて かくあひて又あはん事去りがたきなり およすけて おとなしぶりたりとなり

まゐれり 参りて申なり 物思ひつるに 此君を思給ふよしなり

いで給はん 句は 思はゝからん人 一本に思ひはゝからんといふによる

いけるかぎりの 「戀しなん後は何せんいける身の爲 べしこゝに身のことを思ひはゝからん人の云々と有

るは誤りなり

御かへりには むかへには

こと事は その外の事は

この人の世に 浮ふねを

かくなんの給はするを けふは出まじき云々と仰られ

し事

猶いとかたはならん 御供の人より宮へいとわろき事

ぞと申給へと右近がいふなり

めづらかなる御さまは かく忍びて不意におはしまさ

ん事はをぞまじうめづらかなる事なるをいかで御い

さめも申さで御供人だちもおさなくはまわりしとな

おぼされて 匂の

なめげなることを かの夜の道におそろしき事有しと

のたまひしをもていへり

思たてり 思ひて立たりと云なり

さなんとつたふ 山寺にとの事

わらひて 時方

かうがへ給ふ事ども 右近のかく勘當し給ふが恐ろし

さには仰なくとも山寺にへげこもりなんとなり

よめやかに 實を申すには宮のいとく思すにつけて まづかうへ その中に先中君の御心を思ふて

云々となり

よし／＼ 何事も今よしやせんかたなしこのとのゐ

人もおきぬれば見付られじよとて出て行なり

殿はさるやう有りて 薫といひなすなり

ごだち 御等

殿の御つかひの 薫より

夢見 札に物忌と書きおきては君のもしおはすとも

夢見さわがしかりし故のものいみなりと云てけふは

たいめせさせ奉らじとするなり

まかなひめざましう こゝには物の調はねばなり

おぼされて 匂の

そこにあらはせ給は 御手水の具など多くもあらで

とのたらはぬよと宮の見給ふ故に浮舟のあらひ給は

いわれもゝろともにはあらはんと宮の給ふなるべし

女いとさまよう 薫の心にくはづかしげなるをなり

時の間も 匂はひたすらに心やすく御ことば多くて

おもひしらるゝにも 浮舟の

たれも物のきこえあらば 中宮も薫も又母君もなるべ

し

開ぬれど 隔句なり是は語をへだて下のいらへ聞え おぼしいらるゝ人に 匂宮を云

などしてなびきたるをといふにかゝれる文なり

まらぬをいと心うし 匂の浮舟をいかなる筋の人てふ みれどもく 匂の浮舟を 古今「春霞たな引く山の

事をまらぬ故に告給へとの給ふなり

げすといふとも もしいやしき筋なりともなり

こと事は 別の事はなり

なびきたるを 浮舟の匂に

むかへの人 母の方より

さへづり 物いひの聞わきがたきなり

かたはらいたがり 田舎人どもの見くるしきを宮のか

たにみる人もあらんをうるさきなり

殿なん 母君より迎の人に

さばかりの人 薫大將ほどの人の宇治へおはせんはか

くれなかるべきなり然れば薫の方へも母君へも

此人々にも 又ことさまにいひやるなれば侍ふ女房達

へもいひ合せざるなり

ことにいひおはせず 殿おはせしてふ事は

けがれさせ給て 月なみ云々なり

尼君にも こゝの云々

暮行くは 浮舟の心より匂の方へかねて書きたり

ひかれ奉りて 浮舟

たいの御方 中君

大殿の君 中君よりは少しおとりし事を云六君の萬づ

花やかにとりなして且人もわかき盛なれ浮舟はかく

わびしくてあればことの外に見下だし給ふべき物な

るを宮のいと深くおぼし入りたる御心の盛なれば又

たぐひもまらぬほどに見給ふとなり

こよなくおはしけり 大將殿よりも宮は

すゝり引寄せて 匂

わかき心ちには 浮舟

心より外に 此後宮のたえくゝなる時はなり

の給ふも 匂の給ふにもなり

なみだ落ぬ 匂のなり

ながき世を 意明らかなり

かう思ふこそ 命まらぬといふも末なからんとおぼす

契の爲めにいまくしきとなり

よろづに さまく思ひはかりて京へかへしわたさん

までには戀しさにえ命もたへじとなり
つらかりし 前に二條院にて

心をば 聞え給ふごとく命ばかり定なき世にて人の心

はかはらぬ物ならば心のかたばかりをだになげかざらん物をもとより心も定めなければかたぐなげか

しきとなり
かはらんをば 宮の御心の

うらめしう 浮舟の
くるしがりて 浮舟の

えいはぬ事を えいひがたき事を餘りに問給ふよとう
らみ給ふなり

いはせまほしきぞ たゞちに口づから
よさり 夜に入りてなり

たいふ参りて 出雲權守時方
きさいの宮よりも 時方が申

大殿も 是も后宮より御使の申なり
なめける事 前にもなめける事を聞えさする山が

つなども侍らましといひしたぐひなり
内など 今上

身のため こゝは后より御使のべたる端なれば后の

御身の爲めとのたまふなり
東山に 時方にかく申せしとなり

女こそ 時方猶いふ

けんそうの人 眷屬なり或は見處檢證などいふは當らず是は女の匂宮をまどはせ給ふのみならず宮に住る我等にさへ虚言をいはせ給ふは女一人のつみなりと

戯れいへり

ひじりの名を 右近此女君を東山の聖といひかへ給ふなれば

つみもそれにてほろぼし 聖となりぬれば
まことに 右は戯なりまことには云々と右近が云なり

けに 異にゝていとこと様にやつして入給ひしなどい
つゑならひ給ひし事ぞと也かくやつし給はでも匂の

御事なればなめげにはいかで何とぞとりはかり様の
有べきをとなり

げに 匂宮
所せき 匂の浮舟にのたまふ

いかすべき 此末
あふまじく 堪忍びてはえあられまじきとなり
大將も 薫

さるべきほどと 木より親しかるべき間と云中にも也

世のたとひ かくす物かならずあらはるゝといふ事か
まぢどはなる 薫の我のとが過て浮舟を久しくまぢ遠

におもはせおきたる事をばおきて浮舟のとがにのみ
いひ恨んが浮舟の爲めいとをしと也或人云浮舟の男

二人に見えしつみはいかにものがれがたきを右のご
とくいひなすは色このみの人のことばなりといへり

わがおこたりを 薫の我なり
うらみられ給はん 薫に浮舟の

ゐて奉らん 浮舟を
けふさへ 匂の

袖の中にと 古今「あかざりし袖のなかにや入りにつ
んわが魂のなき心地する

よにまらす 又ちかく來給ふべき御身ならねば此別は
世にまた覺えぬ悲しさとなり拾遺に「別るれば先な

みだこそさきにたていかでおくるゝ袖のぬるらんで
ふをとるかへたる歎

まどふべき哉 末に道を云々と有るよせの語なり
女もかぎりなく 浮舟

なみだをも なみだをだにせきとゞめ得ぬなればまし

ていかにして君をとゞめ得んやと云て數ならぬ身故

に別をもえとめがてなりといふ心をそへたり拾遺別

「をしむともかたしやわかれ心なるなみだをだにも
えやはとゞむる

おのがきぬく 古今「まのゝめもほからく」となり
行けばおのがきぬくなるぞわびしきてふをもてか

けり
この五位二人 大内記と時方なり
江の水を 下に匂宮の歌にも此ことばあり

むかしも 中君へ通ひ給ひし時
あやしかりける里の 宇治の里を云

御物かくし 浮舟の事にて中君のふかく宮にかくし給
ひし事を宮のつらしとおぼせばわたり給はぬなり

なにも 中君は
見給し人よりも 浮舟より

うちこそなどあしけれ 匂のゝ給ふ
御ありさまは 匂のかくて身まかりなば中君はいとと

く薫になびきて心かはらんとなり
人のほいは 浮舟を思ひて終にあひしを下に持て薫を

中君のおもふほいのかなはんとのたまふなり

けしからぬ 中君

かくきにくき 是より中君の給ふことばなり

聞えたらば 薫の方へ

いかやう 我

聞えなしたるにかど 匂へ

人も思ひより 薫

あさましけれ おぞましきなり

うき身には 中君のを卑下して

すゝろなる事も たはむれての給ふ事もなり

誠につらしと 浮舟を匂には隠して薫のものとせしを

下に恨みての給ふなり

人もあり 前にあり

人にはこよなう 薫をさす

さるべきに 宿世因縁をいふ

へだて 我をば

尊よりたるぞかし 浮ふねに

まめやかなるを 此の給ひたる様まめだらて且泪ぐみ

だにし給へるを云なり

物はかなき 匂にかりそのなる様にて逢初たれば我は

其ごとく心かろくて薫にも心有るとおぼすかとなり

すゝろなる人 その初めよしみもなき薫を宮への玄る

べにてよろづをなしけるを云さて薫のむかしよりの

心よせを中君の深く思ひ知りはじめてよりえうとか

らずあへしらひしがあやまちにてかのうつり香のせ

しばかりに宮の御覺えのおとりてかくもさいなまる

るにこそあれなどさましく思ひつゞけらるゝとなり

かの人 浮舟を

みつけたりとほ 匂の

たゞこの大將の 中君は

そらごとを たしかに大將に逢ひしなど

ありやなしや 匂に人のいひつらん事の實かあらぬか

その事を聞知らぬほどはなり

みえ奉らん 匂にむかはんもはづかしきなり

大宮 后宮

御文 匂へ

あなた 寢殿へ

きのふ 后宮の御文

右大將 薫

こなたに 匂の常におはす方

宮にも 后

みるからに 匂の薫を

ひじり 薫をの給ふ

人をさて置て 浮舟を宇治に徒にこめて置てなり

まちわびさすらんよと 浮舟の待倦るよし上にも出

我はまめ人 薫の

よろづにのたまひ 前々に有し事なり

いかにの給はまし 今いひ出てあはめば

されど けふは宮も

いとふびんなる 薫の給ふ

はづかしげ 匂の薫の様をおぼす

わが有さまを 匂のあはしくしさを浮舟はいかに見し

となり

この人を 浮舟

かしこには 宇治

御ふみには 匂より

それだに 御文の通ひだに有るを御みづからはまして

なり

たいふのすぎ 左衛門大夫時方が従者の何故の御文と

もあらず又人もとがむまじきものを御使にてなり

との御供 薫の宇治への御供にてなり

友だち 右近がいふなり

月もたちぬ 正月の過るなり

かうおぼし入 匂は

れいの忍て 宇治へ

こゝには玄のびたれど 浮舟の方にはなり

これはわりなくも 薫は

我はとし頃見る人をも 浮舟の匂の給ひし事を思ふ

なり匂宮の年頃の思給ふ人々をも皆浮舟に思ひかへ

ぬべう思ひなりたるとのたまひしことまことなるべ

し夫より御心地なやみて御す法などあり且何方の御

玄のびありきもたえたと聞けり然らばけふ又薫に

あふ事を宮のいかにおぼさんとなり

おぼさんと思ふも 宮の御なやみの上にとほしきな

り

此人はた 薫を云

おりたゝねど 入立ちてのたまはねどなり

えんなるかたは 薫の艶色はいふにも及ばずなり

こよなく 匂よりは

おもはずなる 匂宮の事

おぼしいらるゝ人を 匂なり

この人にうしと 薫にわすられて此末にわろからんと

思ひ成たるなり

思みだれたる 浮舟のけしき

物の心煮り 待わびある故ならんと薫はおぼすなり

つくらする所 京にわたさんとする所

こゝよりは 宇治の宮は川近ければおそろしげなる水

のさまなるを京なるは水も人なつかしうて花なども

見給ふによしとなり

三條の宮 薫の

かの人 匂

御心ばへの 薫の浮舟をのたまふ

ついたち比 ころといふにて月立ちて三日四日のほど

の夕月をいふ事明なり

をのこは 薫

女はいまよりそひたる身のうさを

匂宮の事もおもふ

なり

さむきすききに 或説菅菫霧雨之齋初寒汀鷺立てふを

引たるは玄かなり然れば此かさぎはたゞ白さを

いひし事しらる

いとかゝらぬ人を 大君の形見ならぬ人にても諸共に

こゝを見んはとなり

やうく物の心しり 浮舟のさま

なぐさめかね 薫の

たえまのみ 浮舟がへしなりたえ間の有かからはあや

うきを夫が上に猶もくちせぬをのみたのめとなりさ

らばたえ間はもとのまゝなるべしとなり

さきくよりも 薫の心

いまさらなり 今まではおもひまづめて過ぎこしを更

に人のいひさはがん様にはせじ

心ぐるしう 薫の

物のまらべ 御遊

この宮 匂

やみはあやなしと 「春の夜のやみはあやなし云々

匂ひありさまにて 梅がかを薫の人香にとりなしたり

衣かたしき 古今「さむしろに衣かたしきこよひもや

われをまつらん云々

ことしもこそあれ 匂の開給ひて

かたしく袖を 右の衣かたしきをうけて書けり

おなじ心なるも 薫も

わびしくもある哉 是も匂の御心なり

もつ人を 薫を云

まさる思ひは 訓舟の心ざしの

ふみ奉り給はんとて よべ題を給りてけさ文は奉り給

ふ成べし

おほんまへに 主上の

かの君も 薫

同じ程にて 匂宮は若菜巻に生れ給ひ薫は次のとし柏

本の巻に生れ給ひて其次々の巻にいとさなき御ほど

どちを出しにもかをるは年のおとりたるさま成しを

こゝに宮よりとしのまされりと有は是も前々にいふ

ごとくよく見合せてなはさるまゝに侍りけんかし

さまへ助けいへる説あれど皆ことわりなし

さえなども 文才なり

おほやけくしき 政の道なり

宮の 匂の

いかなる心ちにて 物おぼせば文作る心ちも無きにと

なり

かの人 薫の思ふさまを見給ふにもなり

いとやおどろかれ給 いよく玄たふ心のおどろきさ

わぐなりかくてつゞきたれば其あすの夜などおほし
たる様なれど下に有明の月とあれば玄ばし間有りし
なり

ほそ道を 雪にいよく道ほそきなり

なきぬばかり かゝる御ありきの御供は身の爲にも恐

あれば成るべし

内記は云々 前に除日に望中こと有るよし書きたれば

其後此式部少輔をかけさせ給ひしをこゝに煮らせて

書ける歟

いづかたも 内記も式部少輔もなり

いひかへさん 今夜の雪におはしたれば

同じやうに 右近と同じ様に浮舟のむつまじうおぼす

にて是は侍従なり

あうなからぬ 奥無はあらぬ女房をなり

わりなき事 せんかたもなき事なりといふなり

かの人 薫を云

中々なるべければ ほとみなきあひごとは却りて御お

もひのますべければかくておはさんにこゝの人めの

つゝましければ川のあなたの家の女君をいざ

なひてあらんとなり

たばからせ給て たは發語のみ
ゐて 浮ふねを

いとみぐるしく 時方なども女君を誰と云らねばなり
らうするさう 領する莊

さきたて、 時方をあないにかなたの家へ
夜ふくるほどに 上に夜更けてせうそこして入給ふと

かせもことにさはらず 風をもさへへだてぬなり
人の御かたちも うき舟

あればこゝは夜明るほど、有し成べし

御ぞどもなり 狩衣なるべし

こはいかに かしこへわたり給はんとするを

ぬぎすべさせ給てしかば 夜の衣をばぬぎおきて着給

右近はこゝの 留守して人めをつくらふなり

へるものは次にみゆ

いだかれたるも 匂に

さよらなる人に 宮を云

有明の月 廿日あまりなり

なつかしき あまり新しきはこはくしきなり

これなん 聞ゆる名所なればいふ

きなしたり 浮舟なり

申て 時方などの申なり

つねに見給 宮の

岩のさまして 橋の木のさま成るべし

これさへかゝるを 匂に逢事を右近にもはづかしきに

ときは木の 即ちばななり

侍従にさへとなり

めづらしからんみちの 朝夕に見れどかくともなはれ

これは又たぞ 侍従をはじめて見給へばなり

給ふ故になり

わがなもらすな 此歌方には「いぬ上」とこの山なる

たばばなの 契り給ふ橋はかはらざらめど我身の末は

不知哉川いさとをきこす吾^名なのらすなと有るを今の

おぼつかなしとなりいづれへさだまらん物ともなけ

都となりて末をよみ損ていざとこたへてわがなもら

ればなり且末に事あらんさがなり

すなと唱へしなり今はそのまゝに心得て書きたり

をりからの 有明のけしきと浮舟のさまとを云

所えがほに 時方なり

なに事も 匂は

こゑひきしめ 宿もりの時方を敬へば

いらへもえせず 時方は宮のおはせばえいらへす且宿

てまびらだつ物けしきばかり引かけてといへり侍従

もりは事の心えらぬがをかしきなり

がまびら着たるさまのあざやかによく見えつればそ

いひたり 時方が云なり

の裳をとりて浮舟にきせて仕る人のさまに匂の御手

かの人 薫

水の湯をとらせてたはふれ遊給ふなりさて此下に一

二の宮を 薫は

品宮へ匂のおぼす人一人二人奉りおきたりと見ゆ然

みゝとめ給し 薫の衣かたしき今宵もやと唱へし事

れば是もさ様にてもおぼすなりけり此下事顯れて後

いみじくかしづかめる 宿守がかしづく時方の又かし

にかをるのおぼしけるに此事をおぼすことあり

づく人ありと宿守や見とがめんとおぼせばさ様に御

姫宮に 女一宮の事なり

てうづなど時方にまゐらすなどなり

忍てゐて 浮舟を

わがすむ方を 或説京の方を匂の見やり給ふと云り

そのほど ゐてかくさんまでの間に薫に逢給ふことな

こばたの里 山城のこたばの里に馬はあれどかちよ

かれあはじといふちかひし給へとのたまへど是はわ

りわがく君を思ひかね

りなき事と思へば女はこたへ給はぬなり

ふりみだれ 浮舟歌

かの人に 薫

このなかざら 末かけて契り給ふをかく書けば薫の方

さらにもの前にだに 匂のおぼす わがかくいふ目の

へもつく心かすとがめ給ふなるべし

前にてだに我にうつらでいらへもせぬと恨給ふなり

御ありさま 匂の

恨ても 古今「恨みてもなきてもいはんかたぞなき鏡

二日と 京にてかく聞えおふせておはせしなり

にうつる影ならずして此本をとりて末の心をばとら

れいのいひまざらはして 女房だちに

ねど右の目のまへにだに思ひうつらぬといふは此鏡

あはひをかしよう かさね色あひといふ意

云々をいひかへたるなり

まびらきたりしを 夕顔の巻にもかしづく人有と見え 人はかうはよも 薫

なほ二條院 なほと云は六君の方よりも中君に御心の

よれるを差せたり

むすめの子 此御は誰とも知りたし

かへり來にけれ 宇治へ

心やすくも 匂の御文を浮舟の

あやしき 宇治の宮はありつかぬ住居なるを云

たゝかのとのゝ 薫

わたしてん 三條宮の近き所に

やうく 母の方より

我心にも 浮舟

それこそは 薫の方

人の御ことを 匂宮

いと 匂のおはさん事は

おやのかふこは 本ははゝがと訓べきを此頃よりや誤

りけん万葉に「たらちねの母がかふ蠶のまゆごもり

いぶせくも有るか妹にあはすて是はおやの守る女の

あひがたきよしなるを譬へて浮舟にはさまんはゝ

かり給ふ事有て匂宮のおぼす様に逢ひがたきを云

かたじけなし 浮舟の爲めを云

ながめやる 長雨をそへたり

空さへくるゝ 御泪にむかへてのたまふ

わかき 浮舟

かゝるうき事 匂に逢ふ事

きゝつけて 薫の

心いられし給人 匂

かゝるほどこそあらめ 末には忘れんなり

かうながらも 此まゝにかはらぬ御心有りともなり

かのうへの 中君

かくれなき世なり 匂の御心とほりて數まへ給はゝ中

君又は薫の間給はずばあらじかの夕ぐれかりそめに

見給ひし末をだに匂のたづね出給へば薫も其ごとく

たづね知り給はんとなり

かうたづね出 匂の

きゝ給はぬ様 薫の

わが心にもきす有りて 一夜のゝち匂へはいかにもは

ひかくれて逢ふまじきをかくなめならぬ心をみづか

らも思ふなり

かの人に 薫

かの殿より 薫

これかれと 匂のを見るに今薫より來たるを「わたり

に見つれど二ふみを一度に見んもこと様なれば先こ

と多く書き給ふ匂のを見つゝふじ給ふなり

猶うつりにけりと 薫よりもまだ匂へ御心うつりけり

と云なり

ことわりぞかし 侍従がいふ

とのゝ 薫

此御ありさま 匂の

御思を 匂の

殿の 薫

猶この御事は 忍びて匂に逢ふをいふ

いかいならせ かくして終には

心ひとつに 浮舟の心なり右近が心といふ説はわろし

後の御文には 薫

おろかなるにやは わがおろそかに思はゝこそゝなた

よりもおどろかし給はざらめかくおもふ心を知給は

ば心おき給はん事かはとなり

水まさる 宇治の渡をいふ

はれぬながめに 戀てながめするに長雨をかぬ

つねよりも 古今「まこもかるよどの深水雨ふればつ

ねよりことにもまさるわが戀てふ心を歌よりことばを

かけていへり

いとおほかる 文のことば

先かれを人見ぬ程にと 人の見とがめぬ間に匂の御こ

たへを先と申すなり

はぢらひて さきに右近などのいひし事あればづか

しと思ひて匂への御こたへはけふはすまじとのたま

ふなるべし

さとの名を うき身と思ひ知につけていよゝ此うち

の住うきとなり此歌をいとよしといふは後世人のく

したる巧みする心よりいへり

繪を 上にも見ゆ

ながらへて 匂の中はながく有まじき事とはおもへ

ど薫の方へ行かくれてたえはてんも又匂に心の残る

よしなり

かきくらし けふは聞えじとはいひたれど終に御こた

へあるなり右にかなたにもこなたにも思ひ定めがた

き心をいひてよめればいづれともつかぬ浮雲の如く

世をへばやと先いひてきてまじりなばとは新勅撰に

「行舟のあとなき波に交りなば誰かは水のあわた

に見んでふ歌をもていふが然る時は跡をけちて失な

ば句は何ともおぼしやらじを我は御なごりを思へば いみじう その女
あともけちかねぬると云なるべし此心を句もあはれ ちかうよびよせて 近きあたりへ
とおぼしてなき給ふなり かうみたてまつるにつけて 女二を
よゝとなけれ給 泣ときの口づきなり すぐたければ 世中を
こひしと思ふらん 浮舟の我を うへさへ心ぐるしう 世に有るからは
まめ人は 薫 つみえぬべき心地して 恨まれんつみなり

つれなくと 浮舟の薫へのこたへなり 敏行朝臣の雨 内になど 今上

の降るを見わづらひぬ身幸あらば此雨はふらじとい されどそれは 世にひいさわぐほど敷ならぬ女ぞとな
ひやりつれば女 数々に思ひ思はず間がたみ身をし り 女すません爲め

る雨はふりぞ増れるとよめると又「つれなく」のなが かゝるれう 大藏大輔 内記が妻の父なり
めに増る泪川てふをとり合せたる歌なりさて身を玄 聞つぎて 内記

雨の降からは我身の幸無雨はふり増といふなりこれ との人など 前にも出

によるにこゝも薫の雨によりて間給はぬをうらみて さすがにわざと 忍びてわざと此人々になり
浮舟の身の幸無きを知りて水まさん遠の里人いかな いとやおぼしさわぎて 句は

らんとたまふか川のみかは袖の上の水かさも増る すらうのめにて 國司の妻
とよめるなり しもつかたに 下京

女宮に物がたりなど 薫の女二に浮舟の事をたまふ かくいたらん 源
なり ゆめくくと 謹て人にもらすなとなり
としへぬる人の むかし逢ひし人と云なすなり おはしまさん事は うちへ

こゝにも うちにもなり

かたかるべきよしを聞ゆ おはしても逢奉りがたきと
なり

さそふ水あらばと 浮舟は古今「わびぬれば身をうき

草の云々 まゝが心ひとつには めのとがみづからいふ
人はた 句

なほ心やすく 句よりの文に
いかなる御心持 はらみ給ふにやと思へどかの月のさ

はりにて石山まうでもとまりぬればさにもあらず うきたる事にやは おもくしき人のたづね給ふから
などいふなり 後はおかたの事にはし給はざらんと薫へ口がため申
かたはらいたければ 浮舟 尼はほこりにいふなり

有明の空 かの桶の小じまによせしことなり
いとけしからぬ 浮舟みづから思ふなり

さるべき事も 句の中君へ中絶えし事など物を深く入 御まをるべをなん 尼の中だちを悦ぶなり
たりしを云 宮のうへの 中君

おはしまさましかば 大君の云々と尼がいふなり つまましきこと かの夕ぐれの事
みやのうへなどのやうに 中君の浮舟にことかはし給 うへのなめしと 中君

ふごとく 心ほそかりし 浮舟をいふ たいふがむすめ 二條院にある右近にてこゝの右近に
あらずかの夕ぐれに宮の浮舟をとらへ給ひし時あり

し右近なり

さりやましてと 此人々だにさ中君をはゝかるを我は

ましてと右近のおぼすなり

あなむくつけや 是は上の匂の有様を聞きて母君の先

いふなり

みかどの御むすめ 女二なり是よりは薫は御妻のやん

ごとなくてあれどよそ人にはとてもかくても有るべ

し匂のかたは中君のおはすからはうきぶねは住すべ

からのぬ事なり

おほけなく おふけなければなり

よからのぬ事を

ばと云なり

身にはかなしく 母は悲しく思ふとも中君の御かたへ

わりなげなればおやこの中をたゝんとなり

いひかはす

尼と語りあはすなり

いとゞ 浮舟

此水の音 浮舟は身をなげんと思ふに母の水の音の事

をいふか様の事おのづから相かなふものなり

かゝらぬ流も 母のいふ

ありかし 世にはかゝらぬ川も有りとなり

とし月を過し給を 浮舟のかゝる所に去年の秋より久

しく待遠に住しを薫は哀とおぼさんと一つの功に母

は思ふなり

すぐし給を 浮舟

あはれと 薫の

むかし 辨尼の詞

さいつ比 或説に紀に大山守皇子の此河におちて身ま

かり給へる時の歌「ちはやぶるうぢの渡りに掉とり

にはやけん人はわがもこにこねてふ歌を引きたり爰

の様此事を思て渡守がうまこと書きかへたりと見ゆ

君はさて 浮舟心

さはり所も 我身さへ失ひたらば

めのものにもいひて 母は

みたらし川に 戀せじとみたらし川にせしみそぎ

入すくなゝめり 京へ渡り給ふにはと母のいふなり

尋て 人求よとなり

今参りは 是はふかくよしあしあらぬ今参りなりよ

りてそれらはとどめ置て然るべきあたりのよき人を

尋ねて御供せさせよとなり

やんごとなき 女二をいふ

よからのぬ中と成りぬる 女二はおひらかなるべけれど なかくくろしく 今まばしとなりて

浮舟の方をば宮に侍ふ人々とかくにくくよから 宮はきのふの 文ありしが母のおはしたれば返りこと

ぬ中と成るべし其ときは互にあらそふ心有りてはわ えま給はぬなるべし

ろき事出来べし此方はいひこめてぞよきまゝにさ 心返りも 浮舟より

かしこに ひたちが方

いと物おもはしく 浮舟は

又あひみでも 母君に

こそと思へば 身をつくさめと思へばなり

心もの 浮舟のいふ

参りこまほしく 母君の方へ

さなん思侍れど 母

はかなき事 京へ出んいとなみも所せくてえなしやら

じとなり

たけふのこふ 國府なりこの如く唱ふさいばらに道

のくちたけふの國府に我は有とおやには申たれ山合 このかうの君 出雲權守時方なりこれが方のをこの

の風此心をもて書けりみちのくちは越前をいふ

なほくしき なほくしき母の出入なんは浮舟の面 ことたがひて よし下にみゆ

ふせなりとなり

この程のくらしがたさこそ 京へ迎へん間待ちわびて かつくしきものにて 隨身

かどくしきものにて 隨身

このをのこにさりげなく 匂の使のをのこ
 さゝ門の太夫 或説出雲權守がかけたるなり古き系圖
 どもは誤りたりといへり
 宮に 匂
 おとりのげすは かの使を云
 とねりの人に かの隨身をいふ
 御ふみまゐらする 隨身直に奉らす人して奉るなり
 今まで おそなはりしとなり
 かしこまりてをる 隨身
 しか見しり給て やうある事ならんと
 玄やうぐわん 内記ももとよりながら式部少輔をさし
 て政官といふべし
 此御ふみも奉り 宇治の返りごとを内記が奉るなり
 宮 匂
 だいばん所 六條院の中宮のおはす所の臺盤所なり
 大將 薫なり
 御前のかた 中宮の
 切にもおぼし 切にていと深くなり
 ひきあけて見給 かの文を匂の
 こまやかに 文を

おとやも 夕霧
 とざまに 外様の方
 この君は 薫
 さうじ 曹司といふ説によるべし或は障子なりといへ
 ど障子より出るとふ語は有るべからず
 おとや出給と 夕霧の出合ふとて薫の玄はぶくなり
 おどろかい奉り 匂を
 ひきかくし 文を匂の
 おとや 夕霧
 さしのぞき給へる 匂のおはす方を
 おどろきて 匂
 おひもさし給ふ 直衣の紐をはづして打とけておはせ
 し故
 殿も 薫
 御じやけの 中宮の御邪氣
 おそろしき 強くおこらせ給へばなり
 さうじに 請
 宮を 匂
 あなだに 夕霧の方
 此殿 薫

火とちす程 火は松明なり程とは此間御前に人なければ
 ばなり
 西の妻戸 うちの
 いかにぞ申ぞとて 其申せし事はいかゞ有るぞとて也
 兵部卿 匂
 式部少輔 内記
 そのかへりごとは うちよりの
 それは見給へず 隨身
 下人の申侍り 即かの童を云なるべし
 おぼし合はするに かの匂の見合ひし文を
 さまでみせつらんを 隨身を薫の心に
 いなかびたるあたりにて 浮舟も女原も田舎そだちな
 るをいふたゞ宇治をいふにはあらし
 おさなけれ 薫のみづから
 さても 然とても
 むかしより 我とは
 ゑるべして 中君の
 たいの御方 中君の事をなり
 年比過すは おぼしもたゞでなり
 いまはじめて むかし大君のゆるせし時は用ゐずして

既人にゆづりおきて後にさる事有るべきかは惣て
 この事は薫もことわり無きなり記者は世中は皆我
 方様に理りを思ふ物とてかける成るべし
 もとよりのたより 初大君のゆるせしをいふ
 をこなるわざ 宮のをこなりといふは文を玄ふる説に
 ていふにたらず薫の今くやしきに我ををこなりと思
 ふなり
 この比 匂
 聞ききかし 御病を問也
 むかしを むかし中君を匂のこひてまだ宇治へおはし
 そのぬほどの御なげきいと深かりしを薫の今おもひ
 合はするなり
 女のいたく 浮舟
 ありがたき物は 實なるが有ることかたきなり
 らうたげに 浮舟
 この宮の御具にて 匂と一具の心さまぞとなり
 思もゆづりつべく 匂へ
 のく心地 退
 やんごとなく むかひ妻などにせん人こそあらめ心な
 ぐさみものにはさてもとなり

人のため 宮は浮舟の末にいかにならんとまでの事を
ばおぼしやりはあらで時の花心の宮にて一品の宮へ
もか様の人々をまゐらせおかれしが浮舟も終にさ様
にてみやづかへに出立たるを聞かんはさすがにいと
ほしかるべしとなり

いとほしくなど おぼしくてと云語をはぶく
猶すてがたく 一度は此まゝに捨てんと思ひしをおぼ
しめぐらせば捨てがたく又事の様をもこゝろ見んと
てなり

みち定の朝臣 内記
猶なかのぶが家 薫の家司大蔵大輔仲信が登る事上
に出

かすかにてゐたる人なれば 浮舟をいふ
道定も 我にうしろぐらぐて匂の御文をとりつぐもの
なればそれのみならず道定が我さへ心かくらん誰も
誰も我にうとかるまじきものなるをといはらだち
給ふさまなり或説はあたらす
人に見えでをまかれ 匂の人に匂ゆなどなり
をこなりとのたまふ さる事も去らでかの方人のわら
はんとなるべし

かしまりて 隨身
少輔が 内記
此との御事 薫の方の事を京へあない申し又宇治の
事をも此隨身に内記が問ひし事有るをも今思ひ合は
せらるれど今申出での事やぶれにもなりて中々に薫
の御爲めいかゞとて申さぬなるべし

君もげすに 薫の猶問ひ給ふべき事あれど事の心を此
隨身にも委しく去られんをはかり給ふなり
かしこには 宇治
御使 浮舟の
物思ふこと 浮舟
たゞかくぞ 薫の文にことばはなくて
浪こゆる 末の松山の歌にてよみ給ひてさるあだし心
有るを去らでをこなりしといふのみなり

人にわらはせ給ふな 或説此文を人に見せてわらはす
なの意といへど文ならでたゞわがをこがましさをせ
めてつゝみ給はらんといふか
いとあやしと 浮舟俄にかく有るを
ひが事にてあらんも 匂の事ならで他の人の故と聞き
給へらんも去らねばなり

御父はもとのやうにして まきつくりひて
かきそへて 同じ紙のはしなどにか
見給て 薫の

かけて見及ばぬ 今までかくかしこげなる事は見ざり
しとなり

かしこには 浮舟はきと心にこたふべし
ゆゝしく 此語は忌々しきにて又いみ侍るといふべか
らぬ事なるを此比は既に古語の心をなれば失へるも
のなり

ひがごと 浮舟
あやしと 右近が去わざを記者のいふなり
見つとは 右近

あないとほし 右近申す
とのほ 薫
おもて 浮舟の

ことさまにて 外にも薫のおぼし知り給ふ事を知りた
る人の右近に語りてかくいふらんとなり
此人々 右近侍従をさす
わが心もて 匂のたばかりて
右近が 物語するなり

ほどぐに 上も下も
これもかれも 二人の男
それに もとの男
すみ侍らす あねのもとには
くにゝも 是も常陸介が我の子にやころしたる男は此
郎黨と下にみゆ

又此あやまち 人ころしたる男
女のたいくしきに 退々
おい給へらざりしかばあづま人 館を追れつれば京へ
ぐし歸る事なくて常陸人の妻などに成りて今も在也
まゝも 或説まゝは浮舟の乳母にて右近と其あねは乳
母が子なり

ゆかしきついで かゝる時につきて此物語はいまゝ
しけれどとなり
亂るゝは 二方へ
宮も御心ざしまさりて 匂へ御心の引給ふと見ゆれば
今はよしやさてもおほせとていふなり

うへの 母君
まゝが めのと
それよりこなたに いとほしといふに隔てつゝくなり

薫へとてまゝなどの心いそぐがその御むかへより前
に匂にぬすまれ給はんぞ母君とまゝが其時の心おも
はれていとほしきとなり

いまひとり 侍従なり

さるべきに 宿世

いとかたじけなく 匂宮の

人の 薫なり 侍従が心

此大將殿 此末も右近がなか／＼といひ去らするなり

ぶだう 武道

ひとるい 類

内舎人

うとねり 内舎人は専らみかどの御まもりにて劔をお

び侍ればすべて武の道を先とするなり然れば上のぶ

よろづの事 宇治の宮を守らする

よき人の 匂と薫は

をのがばんに 番

ありし夜の 前へ匂のおはせし時なり

さるものゝ かのとのゐ人どものなり

君なほ我を 浮舟

いみじく 匂の事なり

いられ給を 心いらるゝなり
などかくしもとばかり 我をいかでかくはと忝なう思
へどなり

たのみ聞えて 薫

げによからぬ かの番のものなどの匂を見付けていか

なる事をかせんなどの事なり

かうなおほしめしそ 右近なるべし

おぼしぬべき よの常は少しおぼし入りぬべき事をも

のどかにておはせしなり

此御ことの 匂の

心いられを 浮ふねのなり

去りたる 右近侍従などなり

かのありし返事 御文返し給ひしをなぞとも聞え給は

ぬなり

このおとしゝ 前に右近がいひおとせし内舎人なり

ふつゝかなる ふとくたくましきをいふ

こゑかれ 聲のまはがれたるなり

ふくろふの 山里にて是が鳴を女どちいとくおそろ

しき物にすべきをもて書ける戯ごとなり

いらへもやらで 内舎人にはいらへもせでおどろきて

浮舟の前へ行きたるさまなり

聞えさせしに 前に右近がいひし事なり

御らんじたるなめり 薫の

御せうそこ そのゝちは絶えて

皆身のかはりぞと 代りの人を出しおくなり

いとあしく成りぬべき あとを暗ますといふに同じ

宮より 匂

昔のみだるゝ 六齋あふことをいつかその日とまつの

本の昔のみだれてこふる此比松のこけは日蔭なる故

にみだるといふ

いとわづらはしくてなん 浮ふね今と成りては匂より

の御文もわづらはしく覺ゆ

ひとかた／＼につけて 何れの方何の事につけてもわ

ろき事はかさなり來べき時なりとなり

むかしはけさうする人の 萬葉九に菟原處女を二人の

男の戀しに何れにもよりがたきにわびてをとめの身

をなげ又真間のてごな又十六の巻に縷の子てふ女も

同じさまによりて身をなげし事有るをいふなり

いづれとなきに 何れにもよりがたきをいふ

思わづらひ 女

身をなぐる例 女の

ながらへば 浮舟

まさる物思ひ 死ぬに増るなり

おすかるべき 東にてそだちたればけ高き方はなくて

をしくおそろしき心有りとなり

ほぐなどやりて 反古の中にも匂の文などやぶり捨る

成るべし

ゑたゝめす 文をうしなふ方のゑたゝめなり

ものへわたり給ふ 薫の方へ

ほど／＼につけて おのれごときもとなり

御かみづかひ をりにふれことにつけたる紙の色あひ

などをいふ

何かむつかしく 浮ふね

ながかるまじき なやましきにかこつけていふ

人の 匂

さかしらに 匂のけさうを我さかしげに思ひてなり

心ぼそき事を さま／＼と思ひもて行くには又ひたす

らに身を捨てがたくも思ふなり身をなげんとするに

いたりてはさ思ふ事有るべきなり

廿日あまり 三月なり

かの家あるじ 前にありし下京のなり

くだるべし 國へ

宮は 句

さて有るまじきさまにて いとすがたやつして句の御

迎におはさんにごにはおそろしきとのお人あれば

えたいめ奉る事もならじとなり此さてとは上の語を

うけて去かしのいふなり

今ひとだひ 終には死んと思ふに此度おはせん時いと

せめて今一度の逢ふことかたきをいふ

かくのみいふこそ 浮舟

さも有りぬべき 句へつく事を

わりなく 句は

宮 句

うけひくけしき 浮ふねの

かの人 句をいふ

いひしたゝめて 浮舟をいひこしらへてなり

人々のいひをらする 侍ふ女ばらかなり

むなしき空 古今我戀はむなしき空にみちぬらしお

もひやれどもゆくかたもなし

京よりとみの 時君よりと思はする成るべし

いとわづらはしく 右近

かどくしき人にて 時方

かゝる御事の かくおはする事などの

やがてさも 句の御迎へを參らせ給はん夜をいふ

いざとき いは寐なりいざたなきは寐ごきなりいざと

きはねざとくに俗に目ざときといふに同じ或説に

さときなりとのみいふは誤れり

さらばいざ給へ 侍従も

いとわりなからん 侍従は

さとたびる 里ぶりたるなり犬の聲は都と同じきとい

ふ中にも人なれぬ山里の犬はことにあらましくとが

めて鳴くなり

のゝしる 鳴きのゝしるなり

すゐらならん おひはぎ又はこなたをあやしととがむ

るものも有るべし

なほとくく 時方

かみわきより 髪を脇の下より引きこして手にとらへ

て道ありくさまなり

きぬのすそを 侍従がすそを時方とりてなり

あやしき物を わらぐつなるべし

あふり 和名抄 障泥和名鞍飾也西京雜記云玫瑰鞍

以緑地錦爲蔽泥今案即後梢以熊熊皮爲之大和物

語にもあふりを敷て女に逢たる事あり装束の抄に行

事には大なめを用ゐて障泥をかけず御幸に障泥を用

ゐて大なめをかけずといへり然れば障泥もむかしよ

り有りし物なり

別記に云されど蔽泥障泥などの字によるに馬腹に足

搔の泥をかけじとて今の荷馬の腹懸めく様にせしを

其後は矢を除く爲めなど異國にても熊皮を用ゐしに

や彼錦を用ゐしと有るも據あり又河内木にむかばき

を敷てと有り云へりむかばき敷くことは古き物に

多ければさも有りなん夜の道なれば従者のむかばき

かけつべし夫を敷つらん

かゝるみち 好色の道

いみじきあだ 本あだを

おに、つくりたりとも 怨敵の上にそれが鬼なりとも

なり

ためらひ給て 句なみだのせきくればなり

なほ人々 上に此事をおぼせし事あるを今のたまふ

有りさま 侍従

さおほしめさん日を ちて隠し給ふ日なり

一かたに 浮ふねをのみはえ恨みす

此ものながめ 上に書きし犬なれば此云々と云且萬葉

にも後のふみにもかゝる時犬の鳴く事多くよみたり

おひさけ 追遯

弓引きならし 宇治の宮の番のものなり犬を追などとす

るにかしこにもあやしと思へば夜行する聲を句の聞

き給ひて恐れ給ふさまなり

いづくにか かくせちに思ひわび給へば山に身を捨て

んと思すがいづこかよからんかの山此山かと心のか

からぬ所も無しとなり是は捨遣に「いづことも所定

めぬ浮雲のかゝらぬ山はあらじと思ふといふを心

をとりかへたり

さらばはや はやは助辭

なくくぞ 侍従

右近はいひたり ことひはかなはぬよしを

いひみたる 浮ふねに

君はいよく 浮ふね

いそぎて 侍従

いらへもせねど 浮ふね

かつはいかに 此人々も
あやしからんまみを なきはらしたる目ざしなり
むこに 無期なり
物はかなげに 浮ふね
おび打かけ 神佛の前にてはかけ帯といふ物をしたる
なり且かのむごにふしたりし其後の事なり
おやに先だちなんつみ 水に入らんと思へばなり
ありし繪 匂の形見の
むかひ聞えたらん様 今も
かの心のとがなる 薫の三條の家をいふ
いかおほさん 死たらん後
うきさまに 死て後あしざまにいひ定せられんはづ
かしくおもへどながらへみて人にわらひそしらるを
母の聞給はんよりは死たるぞよきなどとりくおも
ひ給ふなり
心淺く ながらへ居て
なげきわび おもひわびぬれば水に入りて身を失ふべ
しきてもすくまじきうき名のはづかしきとなり此
歌物に書きつけておきたる事次の巻に見ゆな
がさん事を 水に入らんと思ふをそへたり

おやも 母なり
はらからの 常陸が方のなり
宮のうへを 中君
いま一度ゆかしき あひたきなり
ものそめいそぎ 京へ出るとて
ひつじのおゆみ からにては牛羊を飼置て居所へひき
來て殺すに其一步づつに死に近づくを人の命にたと
へて歩々近死地一人命亦如し是と經文に見えたり
宮は 匂よりの文に
いまさらには 浮舟
からをだに 後撰「けふ過ばまなまし物を夢にてもい
づこをはかと君はとはましこれをとるかへたりから
だの無くなりなば何によりて恨み給ふ所もあらじと
なりはかとは度許にてこゝはそこを許りとあつる所
なきをいふ
かのものにも 薫
所々に 文のかたぐにあらばなり
はなれぬ 匂と薫とは
ねぬるよの よべをいふ
人のいむといふ事なん たゞに人の物いむ事を夢に見

し成るべし
立よらせ給ふ人の御ゆかり 是は女二の方にての御
ねたみにやとなり
少將のかたのなほいと心もとなげに 子うみて後
いみじくいはれ侍りてなん 介がいふならん
寺へ人やりたる 母よりの物をやるなり
かへりごとかく 母へ浮舟
のちに又 後世にてあひなん願し給へ此世はかり初の
夢ばかりなればなげき給ひそとかの寺へ誦經するに
つけていへり
ねをそへて 我なくねをそへてなり
きみにつたへよ 母をいふ
巻數もてきたるに 誦經の
かきつけて 其巻數の紙に書きしなり
こよひは 使の人
ものゝえだに 巻數を木の枝につけおくなり
心ばしり むねはしると多くいへり心さわぎするなり
ゆめも 母君は
みにく、 めのとの
われなくは 浮ふね

ほのめかして めのとのに
おどろかさされて 心のおどろくなり
いづかたと 薫とも匂とも

源氏物語新釋

蜻蛉

此卷名はかげろふの物はかなげにとびちがふを「ありと見て手にはとられず見れば又行くへも去らずきえしかげろふてふにてついたり浮舟の終りのそのあくる日の事也五月にうつりて秋になりぬ薫は廿六のとしなりかげろふとは本は火の氣のきら／＼と見ゆるをいひて日影をも春の氣の空にきらめくをも又蜻蛉の飛ぶさまもそれに似たる故に名づけつると見えたり此むしもとはあきつといひしからはかげろふと云は後に火かげによりし事知るべし委しくは冠辭考にまゐるしつ蜻蛉又は草をもいふなどいへる説は皆誤なり

おはせぬを 湖浮舟の物語の 細或説に濱松物語の事といへど定かに見ば其語を引くべきをさもせぬは推量の事ならん今濱松物語てふ物の有るはいと後に書けるものなり古はたへし成るべし又大和物語の大納言の娘を内舎人のぬすみたるもそのあしたの様をさのみかゝねば夫にもあ

らじ今は見えぬ物語の有りしを書ける成るべし委しくもいひつゞけず 古物語の如くなれば更にもかゝぬとなり

京よりありし使の 三母の方より誦經させし使
まだ鳥のなく 曉なり
いかに聞えん 三京への返事を
かの心しれる 細右近侍従なり
此文をあけたれば 細母の方よりの文
うたて 別様
ものへわたらせ 薫の方へなり
爰にむかへ 先母の方へ
けふは雨ふり 細浮舟の身をなげんと思ひ立ちしあすにて手ならひの巻に横河の僧都にあひし時の雨なるべし

よべの御かへり 孟浮舟の母の方へよべの返事をも右近が見るなり
さればよ 抄母のかたへ返事に「後に又あひみん事を思はん此世の夢に心まどはでと巻數にかきたる歌「かねの音のたゆるひゞきに音をそへて我世つきぬと君に傳へよ

我に 右近にのたまふことの 浮舟のあしずりと 蹉跎 右近
いみじく思したる 三是は浮舟のものを深く思ひたり
しとは見えしとなり
かけてもかく 身をなげなどせん人にてはなしとなり
いかさまにせん／＼ 花戀なんと思ふも物のかなし
きはいかさまにしていかさまにせん
宮にも 匂宮なり
いと例ならぬ氣色有りし御かへり 孟浮舟よりからをだにうき世の中にといめずは云々の歌をいふ
あだなる心なりと 孟匂を浮舟の疑しなり
外へいきかくれなん かのいづこをはかと君も尋ねんとあるゆゑなり
思しさわぎて御使あり 匂の使のきたるなり
あるかぎり 宇治の人どもなり
御ふみもえたてまつらで 抄匂の御文を使の取てかへるなり
いかなるぞと 匂の御使が問なり
うへの 浮舟

心も深くまらぬをのこにて 匂の使なり
かくなんと申 孟匂へ御使の夢とおぼえて 匂心なり
いたくわづらふともきかず 師浮舟の俄にうせ給へるよしを聞て匂宮の不審し給ふ心なり
おぼしやるかた 匂宮
かの大将殿 抄時方申
下人のまかり出るをも 湖匂宮の宇治へおはせし夜時方が下部をもとのゐの者のとがめし事ありしをいふなり
ことづくる事 何の爲めにといふいはれなくてはなり
おぼしあはする 湖薫の
ろなう 孟勿論
さりとして 孟匂
いとほしき 匂の
雨少しふり 湖此雨の事は手習の巻にもあり
人おほく 湖宇治に
をさめ 葬
たゞ今 湖右近
さるはこよひばかり 或説今より後は時方の來るまじ

き事をいふ

さりとして 時方いふ

今一所 孟侍従をいふ

いとあさましく 侍従がいふ

物覺したりつる 浮舟の

一夜いと心ぐるしと 湖匂宮の空しく歸り給ひし夜浮

舟の歎きたる事なり

けがらひ 湖死儀

うちにもなく 湖時方がさくなり

いつしかかひある 細蕪のかたへおはして有るべきこ

となり

らうじ 湖領

たいまやく 契沖云こは雪山童子四句の偽を聞きをは

りて鬼の爲めに身を投給ひしかば鬼神身を帝釋に變

じて捧て助け奉れり童子もし死給は人の惜むべき

事を決定してかねて去らるればそこを心得ていみじ

く惜む人と云事にや

こゝろえぬ 時方聞て花侍従はやがて今宵おさめ奉ら

んといふに又めのとのからをだに見ぬと歎くを心得

心と身を

もし人の 湖浮舟を

御身の 細匂の

又さりともと 湖下すこそひが事をもいひてうせ給は

ぬをもうせ給へりとはいはめ右近侍従などは偽あら

じと匂の頼ませ給ふとなり

君だち 孟右近侍従など

人のみかど 河楊貴妃歸唐帝思李夫人去漢皇情願

又かゝること 湖匂の御事をいふ

此世 此國をいふ

侍従

れいならぬ 抄よのつねならぬなり

人やかくい 浮舟を

かくしも しもは助辭なり

かの殿のわづらはしげに 三蕪より波こゆる比とも去

らずと有りし事なり

去りそめたりし方 湖蕪の方へなり

此御事をば 孟匂の御事は

人去れぬさまに 湖浮舟の心に

みづから身を失ひ給ふ様にて身をなげ給ふ

ともいはず

かく心のまどひに 湖乳母がのゝしる事をいふなり

心えがたく 湖時方

たちながら侍るも 身まかり給ひたるならばかく俄な

らでことまづかにも御弔に參るべき事となり

あなかたじけな 湖侍従

御心ざしに 浮舟の本意

こゝには 宇治の人々の心なり

かく世づかすうせ給へるよし 世に身まかりし人とは

ことにてからもなければ有りがほにて葬などせんと

思て前にこよひをさめ奉るなりといひなせしなりさ

る事など時方の思ひ去らんをいみてそゝのかしてか

へすめり

とかくそゝのかし 孟時方を

母君 湖浮舟の母

さらにははんかたなし 湖母の心

これはいかに からもなければ

ことどものまぎれ 匂の事

いみじう 浮舟

むかし物語 物がたりには鬼にくはれなどせし事を多

く書きたればいふ

かのおそろしと 女二宮の御方を云

御めのと 女二の

かうむかへ 湖蕪の浮舟を

下女などをうたがひ 湖女二宮の方へ心をあはせたる

にやとてなり

今まわり 女二の御めのとの方よりたばかりて今參り

に入ていざなはせしかとなり

いと世ばなれたりとて 湖宇治の人々のこたへなり衣

などを染めあらひはりなども山里にてはことゆかず

とて京へ渡り給はんまうけに里へ下りたる折の事と

いふなり

みなそのいそぐべき 京への用意なす

日比の御けしき 湖浮舟の

うしなひて 浮舟のゝ給ひしなり

かきおき給へる 湖浮舟の文歌

なきかげにと 湖歎きわび身をば捨ともなきかげに

憂名ながさんことをこそおもへと浮舟の詠給ひし歌

なり

河のかたを 身をなげつと思へば

さてうせ給ひけん人を 去か匂の忍び給ひしにつけて

身をうしなひ給ひしてふ事を母の知給はでまどふを
いとをしさにそのよしをいはんといふなり
いひあはせて 湖右近侍従など
御心より 匂のたばかりて有初し事にて女君の心より
ならねばとなり

なきのちに 湖浮舟のなり
いとやさしきほどならぬを 宮の忍び入り給ふは親の
聞てもはづかしからぬ事となりやさしきは萬葉など
にも有る語にてはづる事なり

かくいみじく 母の
からをおきて 残し置てなり
よづかぬ氣色 世に類なきを云
猶きこえて 母に

いとあらまと思ふ 浪のあらく早き川なり
おはしましにけんかた 湖浮舟の流行きし方を
さらになにの 湖右近などのいふ
さるものから 尋ねても得まじき物故になり
とざまかうさまに 母

この人々ふたりして 抄右近侍従が車をよせて葬送の
かたをするなり河日本紀に日本武尊化三白鳥陵より

出て天に上り給ふ群臣其衣冠を葬奉れるといへり
めのとこの大徳 三浮舟の乳母の子の大徳にや
いだしたつるを 湖彼車を出すなり
太夫うとねり 細宇治にさぶらふとのゐ人内舎人右近
大夫等なり並右近太夫は内舎人がむこなり
をどし聞えしものども 湖浮舟の巻に有りし事なり

殿に 湖薫に
ことさらに 湖右近がいふ
はらに 原

ゐなか人ども 湖宇治の里人なり
例のさ法 花入棺捨骨などやうの事なり
かたへ かた親あればなり 下に母のなほくしくて
はらから有はなどさやうの人はいふ事有るを思て事
そぐなりけんかして此葬をことそぎたる事を薫のく
ひ給へること有り然らばこゝは京にては兄弟おはす
る人の死たるをばあとを思ひていとくことそぎて
はふるならひぞといへる山里人も有りてさまく
いひあへるとなり

かゝる人どもの 湖右近心
大將殿 湖薫

大將殿 湖薫
入道の宮 湖女三
石山に 祈の爲め

宮はた同じ 去ばしこそ匂宮のかくし給ふにやとも薫
の疑ひ給はめ夫も近き御中の事なれば明かならんか
らにいかなる人に女君の御心合せて失つらんなど死
の後にあしざまに聞えんかとなり

さる人の 湖浮舟の匂の方に
又さだめて 終には
おぼしよせんかし 薫の
いき給て 浮舟

げになきかげに 浮舟のよみ置し歌をいふ
けしきもみきゝ 湖浮舟の見え給はぬ事を見知りたる
物にはなり

たれにも 薫へも
有しさまをも 何ごともなく失しことか匂の有し事を
明さんとはあらじ
かなしささめぬべき事 ことなく失せしといはハ人
に心あはせしも薫のおぼしさまさんなり又匂の事は

事はやぶれなれば終にいふべくもあらじや
いとくはしき 浮舟の爲め
人ふたりぞ 湖右近侍従なり
心のおに、 湖匂の事心まなるを云

さわぎ給ふ うちには
いとくかしこは 湖薫石山におはせばいよく宇治を
はかくしう 湖浮舟の事を
まづ御使の 細薫より
御さうの人 孟御庄の人石山へ
あさましき 湖薫

その又の口 抄浮舟のうせ給へる又次の日なり
いみじき 薫

つとめて 朝まだきになり
みづからものすべきに おはすべきになり
かくなやみ給ふことに 湖女三宮
日をかぎりて 孟三日か七日か

よべの事 細葬の事
とちめの事をしも山がつの 湖師前に例の作法などあ
る事どもし給はずすくしくあへなくせられけ
るとそしりけるを御庄の人申せしさまなり
こゝの爲めも 孟薫の我

大藏の大夫 細なりのぶなり

いとよいみじきに 湖右近

殿は 湖薫

思はずなるすぢの 匂の事

人も 匂をいふ

なやませ給ふあたりに

略語也いといしく御母宮のな

やませ給ふをうれへて山ごもりし給ふに又浮舟の事

を聞ておぼし亂れぬればうき事の別様に重りて堪ね

ば京へ歸り給ふなり

ことおぼしみだるゝ 浮舟の事を

うたてあれば 別様なりとなり

宮の御方 湖女二宮

ゆゝしき事を 浮舟の事

聞え給ひて 女二へ

なげき給ふ 湖薫

ありし様かたち 湖浮舟

うつゝの世には 浮舟の在しほどは

かゝることのすぢに さきに大君の事あり

さまことに 細道心の方

かの宮はた 孟是より匂の思ひ歎き給ふ事なり

宮ふしゑつみて 湖匂宮

見え給はんも 孟匂の薫に

あいなくつゝましく 三御心の鬼

み給ふにつけて 湖薫を

おどろくしき 匂のたまふ

内にも 帝

宮にも 御母中宮

めゝしく をめくしくを略せる語なるべし利心うせ

てをめかたる時必泪もろくなる物なり又わが妻がま

しくてふ事をめゝしくと云は意別なるを誤れる説な

さりや 抄薫は浮舟の事と心得たるなり

この君は 湖薫

おろかなるかな 湖薫は浮舟を去たふ事の疎かなりと

匂は見給ふなり

もよほされてこそかなしけれ 世の中の常なき

わがかく心よわきにつけても 常に物の哀深く思ひ入

薫のかくつれなきは我忍びごとを知りてにや猶さし

あたりては心づよきがうらやましきとなり

まさばしらは 細吾妹子がきてはよりそふ眞木柱そも

涙つくし給て 目を經ぬれば

いやめのけしき 泪もろき目をいふか俗には伏目にな

りてある様の事に通はしいふに依て彌をめぐしき

を略せし語か下にめゝしくと有もる同じ意と見ゆ

去るかりけり 物思ひのさまは

いかなること 御病とは見えねば

かの殿 抄薫

よその文 宮のよそながら交通はせしのみにはあらじ

となり

み給ひては 匂の浮舟に逢見てはなり

ながらへましかば 浮舟の

宮の御とぶらひ 湖匂宮のなやませ給ふ

ことゝしきゝはならぬ思ひに 浮舟の喪はうちゝ

なればなり

參らざらんも 薫のみ

その比式部卿宮 宇治の八宮の御兄にて光源氏にも御

兄弟なれば薫の御をちにて輕服なり是を浮舟の爲め

の心喪にかねておぼすとなり

すしおもやせて 湖薫

人々まかて 匂へ參りし

むつまじやゆかりとおもへばてふ意にて薫を浮舟の

形見とおぼすとなりいとせめたる心をいへり

これにむかひたらんさまも 薫の浮ふねになり

おぼしやるに 心のうち

いとこめてしもは 湖薫浮舟の事をいひ出ざらんもわ

ろしとてなり

きこえさせぬこと 宮へ

いといふせく 心のうち

今は中々 中々に今高官に成りて心にまかせて參りつ

かふまつらぬとなり

まして御いとまなき 宮は内に參り給ひ夕霧の方此方

など御あつかひにいとまおはさぬをりなり

殿ゐなど 薫のひげしてのたまふ

すぐし侍りて 今までは浮舟の事を匂へ申さで

うせ侍りし人 大君

おなじゆかりなる人 浮舟

覚えぬ所に おもひよらぬ所

そしりも侍りぬべかりしをりなりしかば むこになり

てなり

このあやしき所 宇治

又かれも 浮舟

なにがし獨りを 匂にをこがましく思はれじとのこと

ばなり

物々しきすぢに思ひ給へばこそ 我思はゞ也 浮舟を

やんごとなきものに薫のおもはゞこそ心をおきて物

せめたゞらうたきのみ思ひなれば心おだしくて在

しほどにはかなくなりしとなり此思へばを浮舟の心

とする説は誤れり

あらめ 語を略せり

ことなるとかも 難無きなり

いとほかなく 孟浮舟

なべての世の有さま 世間の無常の中にも大君にわか

れ又其ゆかりをも失へるをこめたる歎

きこしめすやう 此死たる事をなり是より宮のおぼし

うけて心得たりと知り給ふべく夫故に我はなげきも

ふかゝらぬをもふくめたるなり

けしきのいさゝかみだり顔なるを 或説云匂の御耳に

あたるやうに申さるゝ事なり

あやしく 匂の浮舟に逢し事を知り給ふがいとをし

とおぼせどとなり

いとあはれなる 匂

いかにともきこゆべく 弓を

さるかたにも 前に物々しき筋におもはぬよしをいひ

しをうけてさるかたにてもといふなるべしさてここ

にてはふかく宮にあたりたるなり

かよふべきゆゑ 中君の御ゆかりあればとなり

いみじくも 匂の歎給ふを薫のおぼす

いとほかなくけれど はかなくて生ひたち命さへい

やはかなく成りたる人なれど我思ひのみならず此宮

にもかくなげき給ふは宿世高かりけりとなり

たうじのみかど后の 匂宮をいふ

見給ふ人とても 六君中君など

これに御心を 浮舟

この人を 浮舟

ゆかりの やすがてふ意

御心ちのあやまり そこなひ給ふを云

我もかばかり 源氏の御子院の御養子にて大將に任し

時のみかどの御むこなり

この人の 浮舟

おとりやはしつる 女二宮にも

まして今はと 浮舟の今は無と

人ばくせきに 人非ニ木石ニ皆有情不レ如レ不レ逢ニ傾城

色一白氏文集

後の玄たゝめ 葬

宮にも 湖中宮をさしていふ

はゝの 浮舟の母なり

はらからあるはなど 上に此事出たりさて是らは皆か

の冠婚葬祭を嚴にする事といふに泥みて云のみさる

事の過てから國に傳らざるなり世俗の語は其國の宜

きにまかせて天地のいはすることも有りなん事のつ

いでにいはんには此物語は専ら佛道にていへる事多

かれば夫も道の至極にいたれるさたにはあらで方便

説を信せるものゝみなれば俗のみにてまどふべき事

多し

さやうの人 なはくしき人

おぼつかなさも 湖浮舟の死たることの心もとなきに

薫の宇治へおはしてきかまく思へどなり

ながごもり 前の大君の爲の心喪にこもり給ひしごと

くはあらで是はたゞ喪を問ふけがれの上になほ心喪

し給ふとも六七日ばかりの事を長籠といふべし

いとあはれなる 匂

いかにともきこゆべく 弓を

さるかたにも 前に物々しき筋におもはぬよしをいひ

しをうけてさるかたにてもといふなるべしさてここ

にてはふかく宮にあたりたるなり

かよふべきゆゑ 中君の御ゆかりあればとなり

いみじくも 匂の歎給ふを薫のおぼす

いとほかなくけれど はかなくて生ひたち命さへい

やはかなく成りたる人なれど我思ひのみならず此宮

にもかくなげき給ふは宿世高かりけりとなり

たうじのみかど后の 匂宮をいふ

見給ふ人とても 六君中君など

これに御心を 浮舟

この人を 浮舟

ゆかりの やすがてふ意

御心ちのあやまり そこなひ給ふを云

我もかばかり 源氏の御子院の御養子にて大將に任し

時のみかどの御むこなり

この人の 浮舟

おとりやはしつる 女二宮にも

いきといきて 湖宇治へおはしながら籠らでかへらん

もなり

月たちて 四月なり

けふぞわたらましと 浮舟の京へわたるべく契りし日

なり浮舟の巻に大將殿は卯月の十日となんさだめ給

けるといへり

宿にかよは 古今「なき人の宿にかよはゞ時鳥かけ

てねにのみ鳴くとつげなん此無人の宿とは玄での宿

を云と説あれどわろし此歌も死たる人の故郷をいふ

なり今も上に宇治の事をおぼして後ある詞なればた

ゞ宇治をさすなり

きたの宮 二條院をいふ三條宮より北なり

こゝにわたり給ふ日なり 匂の

玄のびねや 郭公は玄でのたをさとて玄での山より來

鳴くといへば此時其鳴くを聞いて我もなかるゝが君も

忍びになき給ふらんとなり後撰に「玄での山越てゆ

きつる郭公戀しき人のうへかたらなん

かひもなき 浮舟の死失せて

同歌

宮は 匂

女君 中宮

よくにたるを 浮舟に

二所ながめ給ふ 中君と匂宮

けしきあるふみ 薫の下心有るをいふ

立花の おもては桶は郭公のめづる物といへば此かを

る所にはかれも心づかひして鳴くべき事よといひて

下は桶のかをるあたりとは大將の方をいひきて郭公

のみだりに鳴きてかくかこちがほにわづらはしき心

をもおこさしむるなりと云意なるべし

女君 湖中君の匂と浮舟の事を

はかなさの 御姉妹皆身まかりぬるを云

我ひとり 湖師心ふかき中にては大君も心ふかくてう

せ又浮舟も物思ひにかく思ひとり給しに中君のひと

り心あさきからにのころといへども是もいつまでなが

らへんぞとなり

かくれなき物から 湖浮舟の事は中君も知り給はんと

とりなほしつゝ いと人わろからず

かくし給ひしが 前には浮舟を中君の隠し給ふと匂

のそれとはなくむつかしく恨給ひしが今は匂のうち

とけて泣つわらひつ其事をもいひ出給ひて且は恨み

給ひながら猶かのゆかりとおぼせばことにむつまじ

となり ことくしく 六君の方にては常にうるはしくてなり

例ならぬ 匂の頼ひ給ふにもなり

ちゝおとや 湖抄六君の父夕霧を

せうとの君達 湖六君の兄

こゝは 湖抄中君の方

夢のやうにのみ 湖抄浮舟の事を匂のおぼすなり

れいの人々 時方道定など

むかへに かの餘りに俄に失せし様を聞給はんとなり

はゞぎみも 浮舟の母

いとかすかなる 宇治宮の喪中のさま

いり來れば 匂の御使 是より下哀なりと云まで皆使

人の心なり

見とがめず 浮舟の無ければよそ人の入るをも

かぎりのたびしも 今は見とがめぬにつけても時方な

どか思ふなりこゝを右近などの心といふ説は文にた

がへり

さるまじき事を 京に在ては

おもほしこがるゝ 匂の

こゝにきては 宇治

おはしましよなく 湖匂宮の

いだかれ奉り 湖浮舟の

舟にのり給ひし 湖桶の小嶋の時

こゝろづよき 御使の人々を云

あひて 御使に

かくの給はせて 上に云ふがごとし

いまさらには 右近

物になど 物まうでにかこづげんとなり

命侍らば ともに死べく思へどとなり

うごくべくも まゐるべきけしきならぬなり

大夫も 時方

たぐひなき御心ざし 湖匂宮の又類もなく思召し事を

見しりたれば終には浮舟をむかへとり給はんからに

人々にもかなたにて去たしくなるべければ何かは急

ぐべきとのどかに思ひて私の心ざしを聞え去らせざ

りしとなり

つかうまつるべきあたりにこそ 京に迎へ給はん所を

いふ

御心ざしも 係想の心を少しふくめたるなり

中々ふかき 今は近くもなれまじくなりてなり

いまひと所 侍従をいふ

よび出て 湖抄右近が

まして何事 右近だに上の如くいふをなり

いかでかいませ 湖宮には穢を忌給はぬかとなり

なやませ給ふ 細時方がいふ

いみあへさせ給ふまじき御けしきになん 御つゝしみ

事を浮舟の御事ゆゑに御忌あへ給はずとなり

こもらせ給ひても 喪に

残りの日 忌の日數の残なり

くろきぬども 令のむね本主の服は父母の服に同じ

ければいと黒きなり

裳は つかへん人もなき故に裳をかけねばすみ染の裳

は設け置ねばうす紫なるをもて行なり

おはせましかば 浮舟の

この道にぞ 侍従が今行道なり

まのびて出給はまし 忍びて渡さんとり有しかば云

人しれず心よせ 湖抄侍従は浮舟を匂宮へと心よせし

こと前に見ゆ

女君には 中君には

おろし給へり 侍従を

日比おぼし 浮舟のさまをかたり申なり

その夜なき給ひし 孟きぬを顔におしめてゝなど書き

たりし時の事なり

かく心つよき 身をなげ給はんとはなり

ましていみじう 湖匂の聞給ひては

さるべきにて 湖何事も前世の縁にてともかくもある

べき身を夫よりほかに何をさばかりおもひて身を失

しぞとなり

これをみつめて 其身をなぐるを

御ふみやき 侍従がみづから心づかぬ事を申なり

かたらひ 匂

聞えあかす 侍従も

卷敷に 湖後に逢ひみん事をと浮舟の歌を申なり

なにはかりの 侍従がことなり

我もとに 湖宮づかへして侍れとなり

あなたも 湖中君もよそならぬ人となり

さてさぶらはんに 侍従がなり

かの御れうにとて 浮舟を京住せん料

さまぐにせさせ給ふ事は 物多くしおき給へども

おどろくしかりぬ 多く給はんは

たゞこの人に 侍従が身に負ふべきほどの物を給なり

何心もなく 孟侍従が心

かゝることゝも 此たうべ物

こまかにいまめかしう 細くしの箱など

かゝる御ふくに 細御服の時分なれば人の見ん事をば

ばかるなり

大將どのも 湖薫

おはしたり 湖宇治へ

このちゝみこ 孟八宮

かゝる思ひがけぬ 湖浮舟の事は中君の物がたりより

前はゆめにもえり給はざりし事なれば思ひもかけ給

はぬ末々までとの意なり

思ひあつかひ 浮舟の事まで

いとたうとく 優婆塞宮の事

心きたなき 湖女君達に薫の心のごりければなり

思ひえらするなめり 湖佛の方便にて我に思ひえらせ

給ふとなり

有けんさま 薫のゝたまふ

えづめあへず 湖思ひしづめもあへずおはせしとなり

尼君などに 浮舟のうせにし事をば尼も知りたればも

しかをるへ申やせんと思へばかの葬せしさまに煩て

死給ひしともえいはれずとなり

あやしきことの 大かたのはかなき事には空ごとをも

いひしとなり

かくまめやかなる 薫の様を云

かねて 三實々しき薫にむかひてはかねてたくみたる

やうにもいはれぬなり

有しさま 湖身をなげし事なり

あさましう 湖薫の心

とばかり 時ばかりなり

さらに 薫のゝ給ふ 右近が云ごとくあらじとなり

あらじとおぼゆる 右近が云ごとくあらじとなり

なべての人の 浮舟の様は

おほどか成りし人はいかで 孟浮舟の心はさやうに入

水などすべくはなかりしと薫の心なり

おどろくしき 身をなぐるほどのなり

いかなるさまに 三此人々の心をあはせて匂宮などの

とりかくし給ふかと思へどもそれもふかく思ひなげ

き給ふほどはえるしとなり

つれなくつくりたらんけはひは 爰の心はいつはりを

いひて強くまことがほするを云なり

おはしましたる 薫の 浮舟の御ともに 湖浮舟のにげかくれ給ふならば供にゆきた

る人もあらんとおぼしてとひ給ふなり

我をおろかに 孟浮舟の恨給ふべき事はなしとなり

いひえらぬ事 湖思ひの外なるなどいふがごとし

さるわざは 湖抄身はなげ給はじ人のかくしたるか

うたがはしくて猶おしての給へり

えんすまじき 湖信

いといとほしく 右近

おぼすさまならて 細八宮の宇治にてこそひとゝなり

給ふべき浮舟なるを思ひがけぬあづまにてとしへ給

ひしことなどなり

世ばなれたる 宇治を云

渡り かくおはしますを 薫の

もとよりのち身のなげき 昔敷まへられ給はぬうきを

なぐさむなり

心のどかなる 三三條へ薫のわたさんとありし事なり

其御本いかなるべき いやく近く迎へ給はんとの事

なり

かのつくば山 細母をいふ
からうじて 年月の思ひをひらくさま成りしなり
心えぬせうそこ 細蕪の波こゆる比とも去らでてふ歌
をいふなり

女房だらうがはしかなり 内舎人がいひし事上の巻
に有り

御せうそこ 湖蕪より
こゝろうき 湖浮舟の
中々なることの人わらはれ 湖なまじひに心高きさま
になりもて行きて此御せうそこなどの様にて見うと
まればいかに母君の歎かんなどひたむきに浮舟の歎
き給ひしとなり

なにごとをかと 其外に何事を思ひわび給ひしぞと心
をよせて見れと思ひより侍らすとなり

鬼など 鬼のくひたらんには衣などは残るべしとなり
されど餘りしければかくしといへる成るべし
いかなることにかと 蕪のうたがひしほどはさのみも
おぼさゝりしをなり

けんそう 願證の字音なるべし又權職歟

おぼつかなしと 浮舟久しくとだえて

おろかに 疎
中々わくるかたありける 湖かへりて浮舟のこと心有
りける故ならんと思ふとなり匂宮の事をいはんとて
なり

今はかくだに かひなく成りしかば
宮の 湖匂
いとかたはに人の心を 女の心をよくうつさするは此
宮のくせぞとなり

つねに逢見奉らぬ 匂には深くうつしたるを我にせか
れて

たしかにこそ 湖右近がいふ
きゝ給ひて 湖匂の事を

いとくほしうて 浮舟の爲めいとほしければ事をい
ひなほすなり

ながめ休らひて いひかねて少し黙然てゐたるなり
おのづから聞しめしけん 中君の方に忍びて在りしこ
とをばとなり

うへの御方 湖御中君
まのびて その初浮舟の

いりおはし 隠れるたる所へ匂のなり

いみじき事を聞えさせ侍て出させ給にき 右に云ふ如
く此時も右近も乳母とつくろひてあれば事なくて匂
の出給ひしといふ意なり

かのあやしく 母の設けし宿なり
其後おとにも聞えじと 匂へ音をもきかれじと浮舟の
思ひ絶しをとなり

いかでか聞せ給けん 匂の
おとづれ聞え 湖匂より御せうそこ
御らんじ 浮舟の

いとかたじけなく中々 なめたる様にて御返事なくば
かへりてこと様なるべしとなり

聞えさせ給ひけん 御かへり
かうぞいはんかし かくいひなすべき事なり此上は問
あらはさんも無き人の爲めいとほしとなり

宮をめづらしく 匂を浮舟の
わが方を 蕪

かく思よるなりけん 身をなげんと
いみじうき世 いかなるうき事有りともなり

ふかき谷をも 都などにすまばいかにうき事有とも水

に身をなげんの思ひよりはあるまじきと也古今「世
中のうきたひごとと身をなげばふかき谷こそあさく
なりなめかの身をなげし事をいはんとて此歌にすが
りていへり

年頃衰と 湖宇治を
宮のうへのの給ひはじめし 湖宿木の巻に中君の蕪に
の給ひし事なり

人がたとつれたりしさへ 稜の人がたは終に水になが
すなれば前つさかの忌々しかりしなり

わがあやまちに 宇治におきたるをいふ
は、のなほかるびたる 心高くとすれどまだくた
人なりとなり

のちのうしろみ 葬をことそぎ過いたるをわろしと思
ひつるに此事を聞てことわりと思ひなりぬるなり

いかに思ふらん 湖母の
さばかりの人の 此母に似ぬなり

まのびたる事は 湖匂の事などはくわしく母の去るま
じきとなり

ゆかりにはいかなる 湖女二宮の御あたりよりいかな
る事が有りけんと母の思はんと蕪のおぼすなり

いとほしく 母の心を

けがらひといふ事はあるまじけれど

或説此所にてう

せぬ人なればなり

のぼり給はで 宇治の家に

つまどの前にぞひ給ひける 榻に去りかけたるなり

みぐるしけれど 見ぐるしけれどとははを誤る歎然

らばつまどの前に榻に去りかけてる給ふもかくては

見ぐるしければ中々として木の下苦のうへに去ばし居

給へりといふならん又もとのまゝならば榻に居しも

見ぐるしけれどとは去げき木陰を見給ふるもくるし

くおぼせどといふか

こけをおまし 昔を御座

とばかり 時ばかり

みめぐらして 今は名残と思ひ給ふなり

我もまた 我も心うしと思ふ故郷なればいよく荒て

誰も問人あらじとなり

この法事 浮舟の

つみいとふかくなる 浮舟

あらましかば 孟浮舟の

いとよく 尼

うつぶしふして 古今「世をいとひ木のもとごとくに立

寄てうつぶしぞめのあさのきぬなり

道すがら 薫

うつせに うつせは空石花貝の意といひて貝を略きて

いへる成るべし萬葉に人丸死て後に妻の歌「けふけ

ふと吾待君は石水の貝にまじりて有といはずやもて

ふを思ひ且うつせ貝も身のなきに魂なき人の身の沈

みて有るをとり合せたるなり

かの母君は京に子うむべきむすめ 湖少將の妻の産な

り

れいの家 ひたちが家

すゝなる旅ねして 湖三條の小家なるべし

ゆしければ 湖母のいましき身なれば子うみた

る所へよらぬなり

人々のうへも 少將のめの子どもなり

大將殿 三薫

忍びてあり かの母へ

物覚えぬ 母は

あさましき 細薫の文

心ちして 我もあるをなり

まいていかなる 我だにあるをまして母君の子を思ふ

やみの中にはやうなしと程過してととなり

ことをなん はかなく衰れとなり

過にし名残 浮舟のかたみとも我をおぼせわれはた同

じくおもふとなり

なごりとは としてはなり

かの大藏太夫 仲信なり

こゝろのどかに ふみの外にのたまへることを太夫が

のぶる也 薫はのどやかに物をなす人なれば浮舟へ

も心ざしの切なりしやうには母の思ふまじけれども

今よりゆくすゑを見給え疎ならじと使しての給ふな

り

またさやうにを 湖其かたにも

をさなき人ども 細常陸が子

おほやけにつかうまつらんにも 此母の子を

いたくしむまじき 子の服といひ所もことなれば

入來る人の穢にふるゝ子もさのみあらじとて御使を

よびあぐるなり

御かへりなく 母は

去なれ侍らぬ 我は

かゝる仰ごと 湖此御せうそこ承らんとてながらへた

るかとなり

とし比 細宇治におかれて

それは數ならぬ 浮舟の數ならぬ故かやうにうちには

おかせ給へば身のほどのがと思ひなしとなり

かたじけなき 京へ渡してんこと

いふがひなくみ給ひはては 湖浮舟うせしを云

里のちぎりも 孟宇治といふ里の名による

さまぐにうれしき 母又は子どもの事さへ

なほたのみ をさなき人どもを

めのみへのなみだ 先浮舟の事につけてなり

御使になて 母のおもふ

あかぬ心ちも 湖たいに祿なきもほいなければなり

かの君にたてまつらん 細浮舟のながらへんには大將

殿へ奉らんと心ざしたる帯なり

はんさい 花班屋帯四位五位の人常用之公卿服者は鳥

屋帯諒間には班屋をさすなり此帯には名物有りとい

へり

昔の人の 湖浮舟をいふ

殿に御らんせさすれば 湖薫に仲信

いとすいなる おひもよらぬ事よといふに同じす

ろとは覺えて有る事なり

ことばには 仲信が申なり

みづから 母の

人に何ゆゑなどは去らせ侍らで 湖浮舟のゆかり故な

どは

あやしき あやしの賤とは人とも見えぬをいふなれば

子どもの事を下りていふなり

みなまゐらせて 家禮申べしとなり

げにことなることなき 薫のおぼすなり常陸の子など

何ゆかり有るにもあらぬを人聞いか々なれどとなり

さばかりの人のむすめ 受領ばかりの娘をも内に仕給

ふ例なきにあらずとなり

さるべき 宿縁にてなり

ときめかし もしみかどの

あやしき女 もといやしき女又は一たび人の妻となり

し女なり

かのかみ 常陸の

人のいひなさん 人の口さがなくて

わがもてなしの夫にけがるべくありそめたらば 薫の

もてなして常陸が娘を内に參らせしといふに我名の

けがるやうはあらず我は初よりわが筋ありて彼にか

かはる事なした心有りてひたちがむすめをもてな

すのみなりとの意也爰に浮舟のゆかりと人のおもは

んてふ意といふ説はいかにぞや上に内に仕まゐらせ

んに受領の娘も例あるよしいへるその餘りをいふな

るをや

思ふらんおやの心に なげき思ふ其母のいとせめて心

なぐさむばかりにかへり見用意せん事はすまじき事

にあらずとおぼすなり

かしこには 湖三條家

をりしもかくて 湖少將の妻の産の頃

年頃いづくになん 浮舟を

去らせざりければ 常陸に

はかなきさまにて 浮舟の

思ひいひける 常陸は

むかへ給ひて後 薫の京に

思けるほどに 母は

かゝれば かく失せられたば

よき人かしく 此ひたちは權門恐れをことごとくしく

し且るなかぶりの物めをつよくする人となり

ひなび 鄙風

おくして 臆

うち返し 御文を

めでたき御さいはひ 湖浮舟を云

おのれもとの人に 湖抄薫の家禮申なり

わかきものどものこと 子どものこと御文にあれば

云

おはせましかば かく思ふは母の心なり薫は浮舟のお

はする程は母へしも使ひし給はざるなり然ればかゝ

る時心きたなからで戸をなげし功は今ぞ見ゆ

かみち 湖常陸

さるはおはせし世には 記者のいふ

中々かゝる 母君への使ひもし給はぬをましておとり

のゆかりをや

わがあやまちにて 湖浮舟を

なぐさめんと 湖母を

人のそしりねも比に尋ねじと 人のそしりをも耳をと

いめじとなり

いかなりけん まことに死つるやもし人のとりかくし

つとも祈りとなるべしとなり

かのりしの 湖律師なりかの阿闍梨昇進の事前には有

六十僧 花鳥六十僧は大般若轉讀の時めさるゝ例多し

と云々又は中陰の佛事に六十僧請せらるゝ事定例な

り七僧も六十僧のうちに有るべきか

母君もきゐて 湖抄來居

宮よりは 句

右近が心ざしにて 句宮のを右近が心ざしとして奉れ

り

いかでかくなん 湖右近には過ぎたるを云なり

殿のひとにも 湖薫の家人法事を奉行するなるべし

いまおどろく人のみ 薫の家人の中にも

ひたちのかみきて 湖宇治へ

心もなくあるじがりしをるなん 浮舟の爲めも薫の人

聞も心すべきほどの事なり

少將の子うませて 常陸がおもふ

去らぎ 新羅

いとあやしかりけり 我方のしわざは

いきたらましかば 湖浮舟の

みやのうへも 湖中君なり

七僧のまへの事 花僧食の事なり七僧法會は四十九日

におこなふ事なり講師、讀師、呪願、三禮唄、散花、堂

達是を七僧といふなり

今なんかゝる人 湖蕨の思ひ人ありしとなり

宮にかしこまり 細女二宮になり

ふたりの 細句蕨

浮舟のうせしを云

あやにくなりし御思ひのさかりにかきたえていといみじ

ければあたなる御心はなぐさむやなど心み給ふこともや

うくありけり 浮舟をあやにくにおぼしめし玄眞さ

かりにその人うせ給ひてはいみじう悲しう思しけれ

ど句はあたなる御心はなぐさむやとてこと女をやう

くこゝろみ給ふとなり

殿は 細蕨

のこりの人を 浮舟の後に

后のみやの御きやうぶく 孟此後の宮の御をち式部卿

宮うせ給ふ事前にあり

猶かくておはしますに 六條院におはします

二宮なん式部卿に 孟句宮の御このかみなり式部卿の

闕に入給ふなり句宮卷に夕霧の中の君をえて六條院

の寢殿を休所にし給ふ

おもくしうて 湖二宮は

つねにしも参り給はず 湖后宮の御方へ

此宮は 細句なり

一品の宮の御方を 湖女一宮なり

よき人の 一品宮の御方は物ふかきに且侍らふ人多か

ればなり

まほに 正面

大將殿 湖蕨

からうじてかたらひ 蕨も大かたの女をばおもはず小

宰相はた用意あればおのづからたやすくかたらひ付

がたかりしなり

小宰相の君 一品宮の御方に

この宮も年頃 句宮も小宰相を

例のいひやぶり給へど 湖師或人云浮舟に蕨の事を心

にあさきやうに句のたまひしやうに小宰相にも

給ふ故に例のとかけり

などかさしも 右のごとくあいきやうなき心などの様

はなどかさしも人にくはあらんと思ひて句の給

ふをうけぬなり

まめ人は 蕨

人よりはことなりと 浮舟の心よはかりしをも合たる

なり

かくものおぼしたる 蕨の浮舟のわかれに

みまれば 小宰相の

玄のびあまりて さし過いたれどもたしてえ有がたけ

ればなり

小宰相 此たびの御悲みを思ひやる心は世によき

あはれしる 人々にもおとらず思ひ奉れど數ならぬにさし過しが

たくて身を思ひおとしつとはで目をふるなりとい

ふはしの詞を書ける様歌によく合せて見るべし掛歌

のつゞけは死たる人におくれずといふに對へて消え

つといふを合せたり

かへたらば をしからの我身浮舟にかへて死たらば蕨

の御なげき少なからん物をとそも消えつゝぞなど有

るに合せて見るべし且此詞は後撰に「草枕紅葉むし

ろにかへたらば心をくたく物ならましやてふ歌の末

を取たるなり此二の句は紅葉を麻にと有りしを席に

誤れる成るべし

つねなしと 一本つねなしと有るは誤なるを助けんと

する説はいふにたらず大君と浮舟とこゝら常なき世

おもくしうて

湖后宮の御方へ

此宮は

湖女一宮なり

一品宮の御方は物ふかきに且侍らふ人多か

ればなり

まほに

正面

蕨も大かたの女をばおもはず小

宰相はた用意あればおのづからたやすくかたらひ付

がたかりしなり

一品宮の御方に

句宮も小宰相を

湖師或人云浮舟に蕨の事を心

にあさきやうに句のたまひしやうに小宰相にも

給ふ故に例のとかけり

右のごとくあいきやうなき心などの様

はなどかさしも人にくはあらんと思ひて句の給

ふをうけぬなり

まめ人は

を我うへに見知るめるうき身だにもはかる事あり

て忍鳴のみし侍りましてたゞ哀知る御心ながらさし

ひかへ給ふと承るはさ有るべき事なるを今も問給ふ

がうれしきと次の詞までかけて見給ふべし

うき身だに 數ならぬ身に消えつゝと云をうけたるこ

とばなり

このよろこび 湖師哀れなる折からいとうれしかり

しといひがてら小宰相がもとへおはしたるなり

いとほづかしげ 蕨は

なべてかやうになどもならばし給はぬ 蕨はおもく

しくてなべての人をばかやうには局に立よりなど様

にはしなれ給はぬ人がらのやんごとなきなるに小宰

相をばことにおぼすとなり然るに此つづねのものは

かなき住ひしてあるを立より給ふがはづかしきとな

り

ならばし給はぬ人がらも云々 給はぬ人からも云々と

引つゞけて蕨の様を云なり人がらと云より小宰相の

事とする説は文にそむけり

いと物はかなき 是より小宰相がすまひを云

よりの給へる かくは書きたれど此末を書きさして御

八講の事をいひ又下に一夜の心ざしの人と此小宰相
をいへるなどを思ふにこよひはふかし給ふならん又
の下に夜更けて出給ふをりく有りといへり
かたはらいたく 湖小宰相は
みし人よりも 浮舟よりもと蕙のおほすなり
などで かゝる人の
出たちけん みやづかへに
さるものにて おもひ人にて
人まねぬすぢは 忍びて逢給ふ事をば人の見まらぬ様
にし給ふなり
御八講せらる 孟明石中宮のせさせ給ふなり
六條院の御ため 湖源氏の御ため
五卷の口 細新の行道の日委しくは前に出
女房につきて 湖女房達によしある外の人の参りて拜
見するなり
五日といふ 結願の口
とりさけ 湖遊
北のひさしも 細玄ん殿の北おもてなり 玄ん殿より
北の廂かけて此道場或は聴聞などの所としつれば夫
をもとの如く煮つらひなほす間西のわた殿に一品の

宮をまさせ給へるなり
姫宮 女一宮一品宮匂の姉宮
ごうして 孟困なり物きくたびれたるなり
御まへは 孟女一宮
大將殿なほしきかへて 細八講終て束帯を直衣にあら
ため給ふなり
けふまかづる僧の 八講の僧
みなまかで 僧衆
かくいふ宰相の君など 湖抄前に小宰相の噂をいひた
ればかくいふといへり
こゝにやあらん 小宰相の
み給へば 蕙の
さやうの人の 小宰相などを云
なか／＼几帳 几帳一つ二つを立てれば夫に隠れて見
えぬを中々に几帳多く立てちがへたればそのちがへ
の間より見通さるゝと云なるべしさなくては中々の
語聞えず
水をものゝふたに 花延喜主水司或云凡供御氷者
起三千四月一日盡九月卅日共四九月八日別一
賦准三石三斗 五八月二賦四賦六七月三賦又云供中

宮水者五八月毎日四顆六七月六顆
からぎぬもかぎみも 是も右のごとくごうじたれば局
にやすらふべきをおまへに人なしとて強てそのまゝ
に侍りて風いれながらある故にかゝるならん
おまへとは見給はぬに 三皆うちとけたる體なれば蕙
の心に女一宮おはすなどはまり給はぬとなり
まろきうすものゝ御ぞ 女一宮
つちなどの心ちぞする 細貴妃の前にて見る宮女の事
を紛色如しと長恨歌傳に書きたり
思ひまづめて 心ときめきをまづむるなり
うすいろなる裳 湖紫の薄色なるべし小宰相なり
物あつかひに 孟水をわる人に小宰相のいふなり細水
をわる辛勞にとなり 湖師あつさのまぎらはしなれど
中々くるしきとなり
たゞさながら 孟其まゝにとなり
こゑきくにぞ 湖蕙の
この心ざしの人 湖小宰相
かしらに打置 湖抄次々の人のさま
この人は紙に 孟小宰相
御まへにも 湖抄宮へも

いとうつくしき 宮
いとちひさく 湖女一宮
我も 蕙
このさうしはとみの事にてあけながら局へ
此あたりはさまざま女の品を書きたり女一宮の御こ
とば小宰相がさま又用意なき女ばらのしわざ下らう
女房の様などなり
このなほしすがた 湖蕙
誰ならんと 下蔭女房
ふと立さりて 湖蕙
このおもとは 三まどひきたる人なり
左の大との 細夕霧
元人も聞つけ給はぬ おとなき故に
かの人 蕙
一ふしたがへそめて 大君より初めて中君浮舟今はた
女一宮に物思ふなり
年頃見奉らばやと 此宮を
中々くるしう 細見初め奉りしことなり
つとめて 其明るあした
女宮の 細女二宮なり

これより 女二

まさるべき 女一の

さらに似給はずこそ 湖女一宮は

あさましきまでに 女一宮の事なり

いとあつしや 薫の、給ふなり さきに女一宮のうす

物を着給ひしかばえもいはざりしにさせ奉りなば似

たまはんやとてなり

例ならぬとの 湖めづらしきものをいふ

あなたにまゐりて 湖女三のかたなり

大貳に 孟かの宮の女房なるべし

もてはやし 薫の

例のねんずし給 細薫

わたり給へれば 湖女二の御方へ

の給ひつる御衣 九輝薫の

ばうぞく 傍若無人といふを略して傍若とのみいふな

るべしうつせみの巻に軒端萩のうちたる様をばうぞ

くなるよしいへるを思ひ合すべし或説どもにさま

ぐの字をあてたるもあたらす

たいいまはあへなん 人も見ずあつき盛にはよくぞ有

べきとなり花水あへはへなんとあり取侍なり人の見

ぬ所にてはうすき單などもあへてき給ふべきにくる
しからぬなり

手づからきせ奉り給ふ 孟薫

御はかまもきのふの同じ紅 湖抄女一宮紅の袴き給へ

るよし前には去るさすこゝにて見えたり

御ぐしのおほさ 湖女二の

ひめして 孟きのふ女一宮の水をもてあつかひ給ひし

其まねをし給ふなり

心のうちもをかし 湖薫の心中なり

ゑにかきて 細李夫人の事なり

にげなからぬ 湖御兄弟なればなり

御ほどぞかしの思へど 似あはぬてふことばを略す

うちなかれぬ 孟薫

御ふみは奉り給ふや 孟薫の一品宮の文を床しく思ひ

てなり

内に有りし時 孟女二宮の返答なり

うへの 今上

たい人にならせ 薫の我妻と成給ひぬるとて

心うかなれ 湖心憂

大宮の 后宮

残りたるゑ 匂の女一宮へまゐらせし残り

この里に 我里と云なり孟上に大宮の御前にて恨聞え

んと有りし是なり

みこの 湖女二

思ひくし 湖屈

姫宮の 湖女一宮

かくしなさだまり 湖たい人となり給ふを云

かやうのもの 孟繪など女二宮へもまゐらせ給へとな

り

なにかしがおそろしく 細薫の申おろして参らせばか

ひもなく思ひ給ふべし女一宮よりまゐらせ給はせば

世び給ふべしとなり

あやしく 中宮

それよりも 女二

かれよりは 細薫詞

もとよいかすまへ 味もとよりうとくおはする人なり

とも薫の室なれば御母后の御里方のはなれぬゆかり

とてだにかすまへ給ふべきにと恨み申給ふとなり

かく去たしくして 湖抄薫の后宮は御兄弟なればかく

申給ふなり

うらみ聞えさせ給ふと 女二の

いかゝ恨みきこえん 湖女二宮

下すに成ふたりとて 孟薫の又たはぶれてのたまり

おどろかし聞えぬと 湖態と女二宮よりは一品宮へ音

づれ参らせぬとなり

大宮に参り給 后宮

例の宮も 孟匂

丁子に深く染たる 河西宮左大臣六月の頃丁子染の帷

を着給ふと見えたり師匂宮の出立のさまなり

こまやかなるなほし 花夏のなほしはこき花田に染た

る心にや

女の御身なりのめでたかりしにも 湖師匂宮は女一宮

にもをとらずと薫の見給ふなり

覺え給へりと見給ふにも 匂宮女一宮に似たまへり

たゞなりしよりは 見初め奉らで有りし時よりはなり

ゑをいと 孟匂宮

あなたに 女一宮へ

我も 湖匂も

大将もちかく 細中宮のおまへ

いにしへのこと 細源氏紫上この事なり

ましてさも 湖内にては時々

すきばみたる 女一宮をすき見し給ふこと

おほしがげざりけり 后は

立いでて 湖薫

一夜の心ざしの人におはん

湖抄小宰相なりこゝは

日のと有るべきを夜と書きしは其夜にあひ給ひしを

点らするなり下に小宰相の局より夜更けて出給ふを

りく有りといへり

有しわた殿 女一宮を見奉給しわた殿をいとせめてな

ぐさめに見んとなり

御前を 后宮

にしぎまに 孟女一宮の御方へ

さまよく 薫の體

左のおほろどの 夕霧

おほかたに 薫のたまふ

この御方のげざんに 女一宮の女房だちに見參給はり

がたくてとなり

おぼえなくおきなびはてにたる 此人々にうとければ

人の覺もよろしからず且はかくみやびかなる御方の

女房達に物いはであらんは翁めきたる心地すればと

なり

ありつかずわかき人どもぞ思ふらん 湖師薫の翁びた

るとみづからいひし故かゝる身にて女房達に物いふ

事を似付かぬと姫の君達の思はんとなり

をひの君だち 細夕霧の子だちを云

今よりならばせ給ふ 細女房だちのいふ

げにわかくならせ 湖おきなびと有るにこたふ

姫宮は 孟女一宮は中宮の御かたへ

大宮大將の 細后女一宮へのたまふ

御ともにまゐりたる 細姫宮の

大納言の君 女房なり此君が申なり

まめ人の 細后宮のたまふ

小宰相などは 是をば后もよしとおぼすなり

この君をば 湖薫

人も 湖女房だちもなり

よういなくて 用意なくては見えざれどの意なり

人よりは 細大納言の申

心よせ給ひて 孟小宰相を薫の

例のめなれたるすぢには 夜更まではおはせど例の人

のごとくにもねはし給はぬにやとなり前に人えれ

ぬ筋などは人に見えられぬ様にし給ふといへばなり 宮もいとあさましと 后

宮をこそいと 小宰相匂宮へはつれなく見え奉るとな おのづからきこえありぬべきを さほどの事はおのづ

かたじけなき事と 孟おそれがましき事となり からかくれ無かるべきを外人のいひし事もなく大將

みやもわらはせ 孟后宮 たがひ給ふなり も云々とのみ云たればもし世人の空言にやと后はう

いとみぐるしき 細匂宮の御事 大將も 薫

思ひしるこそは 小宰相が 命みじかゝりけることを 薫のかくのみ申給ひしとな

はづかしや 御母なれば孟小宰相なども見うとむが恥 り

かしきとなり いざや下すは 大納言が申なり

いとあやしき事を 孟浮舟の事を大納言が申出すなり かしこに侍けるわらはの 宇治に在しわらはなるべし

なくなし給てし人は 湖浮舟なり 宰相が 湖小宰相がなり

宮の 湖匂 かくあやまうてうせ給へる事 浮舟の身なげたりしと

御二條の北方の 湖中君 いふ事なり

御をとうと 弟なり をぞき様なりとて 前に浮舟のをぞき心づき給ふよし

ことばら成るべし 湖抄中君浮舟 有りしも是にて女の御爲めかくしたるとなり

何がしのめは 妻 さてくはしくは聞せ奉らぬにや 孟か隠せば后へは薫

その女君 浮舟 の委しく申給はぬなるべしと申なり

大將殿 湖薫 さらにかゝること 細后宮

まもりめ 守日 又まねぶなど まねびかたになどなり

女も宮を 浮舟も匂を 御身をも 湖匂の

姫君の御方より 女

御てなどの 湖女二宮

いとうれしく 細薫の

大宮も 湖抄女二宮より女二宮へ繪をまゐらせ給ふに

后宮もおほくはへてまゐらせ給ふなり

大將殿うちまさりて 薫よりは是にまさりてよき糸を女

一宮へ奉り給ふなり

せり川の大將 河津古物語歟水原抄云遠君或又十君歟

といへり今思ふに遠は登保なり十は登乎のかなり

中頃よりかなの亂れてみだりに書きたればかく疑は

し古書ならば疑ひなくなにてわかるべし若又此君

たをやかに色めきたるをもとを君といふか然らば

萬葉に枝も登乎々など有る如く今本とをと書きしは

昔の儘にて侍るべしとをたと同じき事古き例有

出ていきたる方 宮の方へ行きしなるべし

いとよく思ませらる 薫の心なり湖女二の宮思ひかけ

たるに

去かばかり思しなびく人の 湖抄或云物語の女二宮の

なびきし事あるにや

疾の葉に これはかのとを君の秋の夕べに思ひわびて

出ていきしてふをうけて薫の此夕風のわきて身にし
みて堪がたきをも女二宮のまろしめさじとうちわび
たるなり

とかきても かの糸に

思ひくゝての 湖本に此で落たり 左右に大君なくな

り給ひし故にこそかくいろくの愁も書きつれとな

り

むかしの人 孟大君

みかどのむすめ 女二宮

又さおもふ人有ときこしめしながらは 孟大君のある

と聞召たらば女二宮をも給ふまじきものととなり

わが心みたり給ふ橋姫哉 上にむかしの人物し給は

とてのことばなれば大君をさして宇治のはしひめと

いへる事知るべし

又みやのうへに 細中君の事

くやしき 中君をゆづりし事

あさましくてうせにし人 細浮舟

とこほる所なかりけるかろくしき 湖女になびき

又身をなげしなどなり

浮舟の

わがけしき例ならずと かの波こゆるよしよみてやり

給ひしを浮舟の心の鬼になげきし事なり

きし給ひしも 右近が語りしなり

かたらひ人にて 浮舟を

宮をも 孟句

思ひ聞えじ 恨みまじきなり

女をも 湖浮舟

心のどかに 薫を記者のいふ

みやはまして 湖句

かのかたみに 彼かたみなり句の心なり浮舟の事なり

たいの御方ばかり 湖抄中君

ふかくも見なれ給はざりける 中君と浮舟と兄弟なれ

ど俄に其母のわたせしもまた去ばしばかりなり

おぼすまゝに戀しや 湖師句宮の中君に浮舟の事をさ

のみはえの給はぬなり

この人ふたりなん 右近侍従

おぼしたりしも 浮舟の

侍従はよそ人 右近はちもが子なり

ありふるに 宇治に

うれしき瀬もやありと 祈りつゝ頼みぞわたるはつ

みるたびごとに 侍従が

せ川うれしきせにもあひぬと思へばこれは或抄に引

て事の心はかなへどこは小一條院の御歌とおぼしき

を今ある住吉物語に入たり此住吉物語は後人の作り

し物にてむかしのにはあらず然れば紫も此歌はおも

はじやおぼつかなし

川音

京になんあやしき所に 侍従は

尋出給ひて 句の侍従を

かくてさぶらへと 句の御方に

御心はさるもの 句の

さるすぢのこと 湖中君と浮舟は兄弟ながらうはなり

のすぢまじれる中なれば其ゆかりにて侍従まらば

人の物いひ如何となり

心ほそくよるべなきも 湖侍従が心

ゑるたよりもとめて 湖后宮へ侍従がゑる縁を求めて

宮仕にまゐるなり

よろしき下らう 湖抄侍従が事

大將殿も 三薫を見て侍従があはれに思ひ出るなり

侍従が

やんごとなき物の姫君のみ よろしき人の御むすめも

此后宮へはおほく参り給ふとなり

なほみ奉りし人 細浮舟

此春うせ給ひぬる 孟蜻蛉式部卿宮のことなり

式部卿の宮の御むすめ 湖宮の君と云

せうとの右馬のかみ 細織母の兄弟

いとほしうなども思だらで 宮君を

さるべきさまになん契ると 孟まゝ母の弟の右馬頭に

いひちぎるとなり

きこしめすたより 湖抄后宮の開召給ふなり

いたづらなるやう 湖右馬頭などにおはする事の給ふ

なり

いと心ほそく 宮の君

なつかしう尋ねの給はするなど 湖后宮の尋ね給ふを

をうとの侍従 細蜻蛉式部卿の息の侍従なり宮の君の

兄弟なり

むかへとらせ給てけり 中宮の御方へ宮君を

姫宮の御具にて 三女一宮のよき御とぎぞとなり

いとよなからぬ 中宮と宮の君はいとこなり

かぎりあれば 式部卿の御むすめ后宮の御ゆかりなが

らみや仕人なればとの心なり

宮の君などうちいひて 孟式部卿の御むすめなればな

り

裳ばかり引かけて 仕ふるものは裳唐衣をきるを是は

式部卿の宮のひめ君にて后宮も御ゆかりなれば唐ぎ

ぬをばきせ給はで徒に裳を引かけさせ給ふなるべし

兵部卿の宮 湖匂

此君ばかりやこひしき人に 宮の君を浮舟に思ひよそ

へ給へり

父みこは 宇治の八宮と式部卿宮は兄弟なれば宮君と

浮舟はいとこなり

例の御心は 好色の心なり

人をこひ給ふにつけて 湖浮舟を戀給ふにつけても宮

の君などゆかしく覺すとなり

大將もどかしきまで 湖抄宮君のかくおとろへて出立

給ふをもどかしき世なる哉春宮にまゐらせん又は薫

にやなど父宮はたゞ昨日までこそこの給ひしに今日は

みやづかへに出給へるかと薫は歎き給ふなり

水のそこに 或説宮君につけて人のおとろへをおもへ

ば浮舟の身をなげて末のおとろへを見ずなくなりぬ

るもよしやと思ひ給ふなり

人よりは 湖薫の宮君へ

この院に 湖六條院なり花源氏君の後に六條院に人々

の住給ふさま前の卷に見ゆ

つねにしもさぶらはぬ人ども、 湖抄時々の出入ばか

りしてさぶらふ人も有る成るべし

左大臣殿 夕霧の光輝をいへり

むかしの御けはひ 光源氏をいふ

つかうまつり給ふ 后宮へ

いかめしうなりにたる 孟夕霧の類繁昌なり

この宮例の御必ならば 匂宮なり浮舟の思ひなくばと

なりいまだ物思ひに違例名残あるなり

こよなくまづまり給て 匂の御心の色々しき事此程ち

となほりしなり

みやうち参り給ひなんとすれば 后宮御輕服過て内

へまゐり給へり

みな参りつどひ 六條院へ

此宮に 匂

かゝるすぢは 湖抄御遊の事

朝夕めなれて 細匂の御さまなり

今見ん初花 契沖云上を承て見るにさまぐの御遊を

匂宮はめなれても猶初花の如くめづらしくし給ふと

云にやと今考るにげにもさまし給へるといひて大

將の事をいふに大將の姿などをばいはで入りたぬ

事をいへば右の説が然るべきなり

大將の君はいとさしも入りたちなど 契沖又云大將は

浮舟又は女一宮の事を思ひて御遊などには心の入ら

ぬ折と云にやと是もまかるべし程にてと云ぞ此心也

心ゆるびなき物に たはむれあそびもま給はねばなり

れいの二所 孟匂宮

いづ方にもくよりて 浮舟のながらへばいづれの方

につき給ひてなりとも御宿世のよきほどあらはれて

めでたき世を経給はましをとなり

かの侍従は 宇治にありし侍従なり

世にぞおはせましかし 湖浮舟のなり

宮はうちの御物かたり 后宮六條院におはすれば匂宮

は内わたりの事を御物語し給ふなり薫は御前を立て

云々

いまひと所 薫

みつけれ奉らじ 細侍従なり薫にかぐれたるなり

御はてもすぐさす 浮舟の喪をも過ぐしはてず出し事なり

わた殿にあきたる戸口 廊のめどうを隔て相向ひたる局の戸口の開合たるなり

おはして 薫の詞ゆ薫の我との給ふなり東のわた殿の戸口にての事なり

女だにかう心やすく 我はまめなる方にかたくなにて女に強事の無ものなれば心やすく思ひて女房たちはむつまじくし給ふべきものぞ女にもかくまめなるはあらじとなり

さるべからんことをし聞えぬべくもあり ことなど様の物をも教へつべしといひて女房むつまじくして思ふ筋の便とせんとなるべし

やうくみしり給ふべかめれば 女房たちの我心をいといらへにく、女房たちのなり

辨のおもとして 細女一宮の御方にさぶらふ女房の中に辨とおとなびたる人有りて皆人はとかく申さぬを是ぞ答いふなり

そもむつまじく 辨のおもとの詞なり そもは薫の女房はむつまじとおぼすべきやとの給ひしをうけてそ

ふたにするて 置なり

心もとなき花の 花の末々のはつかなるを心もとなきと云なりいとほ末の所のみを折てあればふとは何の花とも分ぬも有るを心もとなき花の末々と語をあやにいひ下したるなり

かたへは 人々の體なり

几帳のあるに 女房共を薫の御覽すればなり

うちそむき 薫にむかはぬなり

おしあけたる戸の方 戸方の方なり

をみなへし 右の硯のふたに女郎花も有りしを以てよみ給ふなりけり古介に「をみなへし多かる野べにやどりせばあやなくあだの名をやたちなん是をうけてかくまじるとも我はまめにてみだる、心なければ誰も我によりてあだなはかけ侍らじ然れば女房たち心やすく思ふべきをいかではち給ふらんとなり

こゝろやすくはおぼさで かく實法なるものをいかで恥給ふぞとなり

さうじにうしろしたる 障子の所にかなたを向きて此方をうしろと点たるなるべしさて薫のちかくにゐたる人なれば歌を見せ給ふなり

れもと云て理りいふなりさて殊なる故よしも若らぬ人は中々にはち侍らぬ事有るべしとなり是は辨が面無さを若らで此御こたへ申といはん料なり

聞え侍らぬや 一本に侍らぬやはと有るはこゝの意をえぬ人のわざ成るべし

ものはさこそは 世間の事はいづれも如此となりかならずゆるゑ そのゆるゑよしの有を尋ねて御らんせん

にもおはすまじけれどかく御いらへを申は故なき我心見えにてはづかしけれど然ながら面つよく今まで物しなれし身にも似すよし有げにてもたしてをらんは傍いたくて申なりとなり

おもなく 湖面つよき心なり

身におはざらんも 湖おもとが我身を云はづべきゆるゑあらじ 辨は恥べきなれどわが故よしなき身のならばしにてはちやらで申といへるを薫はおしつけて我を恥べきゆるゑよしなき人と定め給ふがくちをしきとかこちなすなり

みれば 湖薫のからぎぬは 辨がさまなり女の晴れの時のうへのきぬなり

みだろき かなたを向きたるまゝにてなり

いとや／＼ やがて返しするなり

花といへば 上に薫の女だにかく心やすきはあらじといひこゝにも我まめなるよしのみよみ給へば女はみなあだなるといふに似たるをとかめてさのみなべての露になびく物かはといへり

かたそばなれど 誰とりあへず書きたるを見たまへるばかりなればかたそばといふなり

よしづきて 書きたる様

たれならん 薫のゆかしく思ふなり

いままうのぼり 御前へまゐらんとせし人のかをるに

みちをふたげられてゐたるなるべし

いとけざやかなるおきなごと 契沖是はさきの薫の女郎花の歌をおさへて翁などのいはんやうなりとて翁こと葉のにくしと戯れて云なり即下の歌其心なり次の詞又同じといひたりさも有るべし

旅ねして 辨のおもと

宿かさば一夜は 薫の歌なり歌にかくれたる所なしうつりうつらずさて後 うつるやうつらぬやを旅ねし給ひて後實法なるかいなやを定めんとなり

なにかはづかしめ 辨のおもと詞
大かたの野べの 前に野べに交る共とよみ給へば旅ね
して心見給へと申せしは只大よその野べの事をさか
しらに申せしなるを宿かさば一夜はねなんとよみ給
ふは女どものあだなるに定めてはづかしめ給ふなり
いかでみだりにやどかすべき物かはと云なるべし
はかなきことを 薫の様

人はのこりきかまほしく 興あるさまなれば
みちあけ侍りなん 薫の詞戸口にゐ給へばかくの給へ
りこゝは人の道なればとなり

わきてかの御物はち ことにはち隠れ給ふ女房だちは
万葉に「よひに逢ておしたおもなみ隠れの」とよみ
し如くさる故あるをりからにて恥るならんとふくめ
たる詞なり

おしなべて 女房だちの心細辨がいらへたることのお
くなきにこゝの女房は誰もかくあらんとかをるのお
ぼさんとなり 御師奥ふかゝらぬを云

のこりなからんと 御師奥ふかゝらぬを云
おもひやり給こそ 御薫の
ひんがしの 御薫

中について 白氏文集大底四時心總苦就中斷腸是秋
天この斷は斷絶の意なればたつはともたゆるはとも
よむべしこゝにたふると書きしは後人の書きそこな
へる成るべしたふるとては堪の意にて大にことなり
白氏文集の句前に注
有つるさぬの音なひ 孟さきに薫の歌よみかはし給ひ
し人なり
みやの 孟句宮なり
かの御かたの 細女一宮の中將君なり

猶あやしのわざや 薫のおぼすなり
たれに^{我は今}かとかりそめにも 薫の此女房は故有げにおも
へばふとゆかしげにも有しを句のとひ給ふに某がと
名をさしいはれたるは其女の爲めいとほしきこゝち
せらるさてかく句には常にめなれて女どものまたし
きがねたましきなり薫は此女一の御かたさまにはう
とくて心うしとなり

打思ふ人に ゆかしう
なざし 名指
この宮 句なり
おりたちて 句の好色の事なり

君の様なる心はなしとなり
いらたちて 此宮へ
すこしはすきも 少々好色をも習はんとなりされどつ
きなしとなり

今はなほつきなし むかしだに此事にうとかりしを今
は大將にも成り給へば有るが上にまだくつきなさ
のまさりたるといふか猶の辭は古より此頃迄は皆ま
だてふ意に用ゐたれどこれらや少しその上にてふ方
へうつる意ありともいふべし

わがさち口をしう 花さちもは詞なり

この御ゆかり 細女一宮の方さまの事

いかでこのわたり 女一宮の方

めづらしからん 二には有るが中にまれによき人を

いふ 句の

れいの心いれて 句の

かたらひとりて 薫の

わが思ひしやうに 湖浮舟の事になり

やすからすと 句の御心に無念に思はせんとなり

だにも思はせ奉らん さ思はせてだに少し我心をやら

んとなり

こゝろばせあらん人は 女の

かたの御方 心ばせ有るは少しとなり

たいの御方 孟句宮の北の方中の君の事なり

ふさはしからぬ物に 句のあだんしき御心を思はし

からず中君のおぼすとなり

いとびんなきむつび 花薫の我事なり

おほかたのおぼしは 細中君の我にはかけはなれたる

さまにて又たのもしき方には思給へることをいへりみなおどろかるべか

こゝらの中に 細一品の宮のかたをさしていへり孟中 たれどもとなり

にるべきこのかみや 右の薫の宣ふは女一宮を見給ひ なるべしとなり
たき心ぞと中將が思ふ故に同じ遊仙窟カホハニカリヲメに容貌似明カホハニカリヲメ さらなる歎きの 女一の宮の御事を聞て覺えず歎息
潘安アンシヤクハハカクノイハレハナリ 外 甥 氣 調如ツクシカクシ 兄 崔季珪クヱイキ 之小 せしなり
妹 てふを以て女一宮を見たくおぼさば御兄ミケイ 匂宮を をかしの御身 薫の心
見給へといふ意にてにるべきこのかみや侍るべきと あやしと思ひよる人も 女一宮に心あるかと人やおも
いらへしなり ひよらんとなり

中將のおもと 花といへば名こそあだなれとよみし人 さし出たるわごんをたゞさながら せりふし和琴をさ
なり し出たりけるを其まゝに去らばもせずしてかきなら
まろこそは 薫の詞 御母方のをぢなれとの給ふも又 し給ふはやくまぎらはさんとてなり

右の匂の意なり りちの去らばは 律は秋なり又女にとればなり
れいのあなたにおはしますべかめる 中宮の御方へな をりにあふ 秋なり
り女一宮はいつものごとく中宮の御方にこそおは 心いれたる人は 孟物の音に心入たるなり

すらめいかなる御慰みかあると薫の女房に問給ふな わが 細薫の心
り はみや 細女三宮
この頃御里すみ 女一宮 さいいばら 一品宮はあかしの中宮の御腹なり

おちきなく 二も遊仙窟に無情又多事と書きたるを ことくならざりけるを 后腹と女御更衣の腹にても
もあぢきなしと訓し意にてのたまへり然ればこゝは 御門の御思しはなり

さまぐ思ひに堪へかねて問給ふ意にて多事を訓せ この御あたりは 湖女一宮の御方なり
しにこゝはよるへし あかしのうらは 三明石の中宮の御さいはいおはする
いづこにても 人々のいへるなり只かやうの御遊など 事をいへり

わがすくせは 女二宮の事なり 事になれずしてまことに思ふまゝに申なりされどそ
ましてならべて 女二と女一宮をならべてもち奉りた の人などはおきて我いふはことばより外に實に本づ
らばましてやんごとなかるべしされどまかならべん きていふとなり

ことは難しとなり まねぶやうに その人々のいふ事を
このにしのたい 玉かづらの居給ひし所なり 君にもいひつたへす 孟宮君にも申さずおとなびたる
いで哀是も又同じ人ぞかし 光に女一宮と女三宮の事 人のさかしらにこたへ去たるなり

をいへるにつぎて是も王家裔ぞとなり おもほしがげざりし 内よりの返事なり 宮の君のか
みこのむかし心よせ 細式部卿宮の薫にと思ひ給ひし くて后宮におはさん事はなり

ものをとなり 故宮 御父式部卿なり
いひなして 女房にその度々のたまひしこと此下にみ 折々きこえさせ給ふなる 湖薫のなり

そなたへおはしぬ 宮君のかたへなり 御去りうごとも 湖薫の宮君に對面なして女房など
かいやかし 恥かしむなり への給ふゆゑに後言シロコトといふなり

これぞよのつね みやはならぬなり なみくの人めきて 細薫の心なり次々の人の様に人
と思ふ 薫の 傳ばかりなるとなり

よりて 湖薫の もとより覺しすつまじき 薫の詞なり 薫とはいとこ
すこしおとなびたる 湖宮君の女ばうなり といひ今はまた薫の御兄弟の后宮にもおはせばなり

人去れぬ心よせなど 薫の詞なり 此父みこの薫の我 げにと思さわぎて 女房
に御心よせ有りし事右に有るをうけて云也さてかく 松もむかしのと 宮君詞細古今「誰をかも去る人にせ

様に云事は人ごとにいふ事ならんまかし我はかゝる

源氏物語新釋 蜻蛉

五千六百七十九

ん高砂の云々の意にて今は去る人もなしと思ひしに
となり

もとよりなどのたまふすちは 細もとよりおぼしすつ

まじきといへるこたへなり

入づてともなく 湖抄宮の君の直の返事なり

たいなべての 薫の心なり

かゝるすみかの人と なみくの宮仕人をいふ

たいいまはいかでかばかりも 仕る様にておはせば

人にこゑきかすべき 人に御聲をきかせらるべき事に

はあらずとの心なり

なまうしろめたし 今も猶女房してこたへ給ふべき事

なるをと薫のおほせばおもからぬ心かならんとお

はめかるゝなり

なまめかしからん かたちも今様のをかきさまなら

んと薫の推量なり

この人ぞ又例の 匂宮はかならず御心みだるべしとな

り

ありがたの世や 十分なる人はなしとなり

かぎりなき人のかしづき 式部卿の一段かしづき給ひ

し君ぞとなり

かばかりぞ かばかりの人は世に多からんとなり

さるひそり 宇治のうばそくの宮

人々の 湖大君中君なり

はかなしや 湖浮舟なり

何事につけても かやうの事をみるに付ても八宮のあ

たりを思ふとなり

ひとつゆかりをぞ 宇治の

あやしうつらかりける 大君も浮舟も

ありと見て 是は六帖に「ありと見てたのむぞかたき

かげろふのいつともわかぬ身とは去るゝてふに先

はよりて手にはとられすと云に大君又は浮舟などを

もかねてわが物ともならずして去かもきえうせられ

ばなり去か見ずば手にもとられずの句いたづらにて

且の詞のより所もいひたらはじ

あるかなきかのと 後撰に「世中と思ひしものをかけ

ろふの有か無かのほどにぞ有りける是をいへり此歌

六帖には少し變れり掛かげろふは古事記万葉にもゆ

る火をいひ夕日の光春の陽炎又曙の東のひかりをも

又蜻蛉をいひたる事いと多し此中にこゝによめる

は詞にかげろふの飛ちがふをとてあれば蜻蛉をこと

のおこりにてかのそらのかげろふ光などをかねてよ
めるなり

寶曆八年四月六日注訖

賀茂縣主眞淵

源氏物語新釋

手習

薰廿四歳の春より廿五歳の春まで有
 やそぢあまりの母 大尼なり
 いそぢばかりのいもうと有けり 尼君
 はゝのあま君 大尼
 山ごもりのほいふかく 僧都心
 さいふべきことゝ 僧都心
 おはしまさばはや 宿守詞
 いとよかんなり 僧都詞
 このおきな 宿守
 かしらのかみあらば あざり心
 めづらしきことにも 大とこ詞
 げにあやしき あざり詞
 きつねの人に 僧都詞
 彼のわたり給ん 尼君達
 いまづまり 寢鐘
 さらにひざうの 僧都詞
 なにのさる人をか 法師ども詞

あやしのさまに 宿守
 爰には 法師詞
 きつねの 宿守詞
 さてそのちごは 法師詞
 いきて侍りき 宿守詞
 まゐりものゝ 食物
 鬼か神か 法師詞
 かほを引入て 浮ふね
 いであなさがなの 法師詞
 うつぶして 浮ふね
 なにゝまれ 法師詞
 僧都まこと 詞
 御くるま 老母
 有つる人 僧都詞
 なよくとして 法師詞
 玄かぐの 僧都詞
 うちきくまゝに 尼公
 をのが寺に 長谷なり
 たゞこのひんがしの 僧都詞
 いそぎ行きて 尼君

うつくしげなる女の 浮ふね
 紅のはかまぞきたる 香はいみじう
 いけるやうにもあらで 浮ふね
 ものゝ給へや 尼君詞
 物おほしぬさまなり 浮ふね
 湯とりて 尼君
 たゞよわりに 浮ふね
 中々いみじき 尼君
 さればこそ あざり詞
 いかによ 僧都詞
 いとよわけに 浮ふね
 えいき侍らじ あざり詞
 あな心うや 尼君
 からうじて 浮ふね
 まれゝものゝ給を 尼君詞
 物もいはず 浮ふね
 身にもしきすなどや 尼君詞
 故八宮の御女 下すの詞
 右大將殿の 薫
 さやうの人の 僧都心

ことさらに 下す詞
 大將 薫
 宮の 八宮
 御女もち給へりしは 大君の事
 姫宮を 女二
 あま君 大尼
 この人は 浮ふね
 此人を 浮ふね
 ひえ坂本 大尼
 そこにおはしつくほど 大尼
 おやをあつかひ 大尼
 このゑらぬ人を 浮ふね
 おいの病 大尼
 のぼり給ひぬ 山へ
 もし尋來る人もや 尼君心
 夢がたりも 長谷にての
 けしやくこと 祈禱に芥子をやく事あるなり
 なほおり給ひて 文の詞
 あがほとけ 僧都を云なり
 いとあやしきことかな 僧都心

よろこび 尼君
 かく久しう 詞
 みつけしより 僧都詞
 御ようめいかな 容面
 さらに 尼君詞
 なにかそれえんに 僧都詞
 むぎんの法師 無慚
 人にかりうつして よりましにうつすなり
 おのれは 物のけの詞
 うしなひてしに 大君の事
 この人は 浮ふね
 つきたる人 よりましの童なり
 さうじみの心地は 浮ふね心
 宮ときこえし人 句
 いかなれば 尼君詞
 心には 浮ふね心
 いとほしげなる 尼君詞
 たいたいきばかりを 浮ふね
 今はかばかりにて 僧都詞
 夢のやうなる 尼君心

おこしすゑつゝ 浮ふねを
 などか心うく 尼君詞
 いとはづかしと 浮ふね心
 あやしかりし程に 詞
 あまりとふを 尼君心
 竹取
 たがとりのおきなよりも 大和物語たかとりがよゝに
 なきつゝとゞめけん云々
 このあるじも 地
 あてなる人なり 大尼
 上達部の 衛門督
 その人 衛門督
 覚えぬ人の 浮ふね
 ねびにたれど 尼君
 昔の山里よりは 浮ふね心
 彼夕霧の宮す所の 地
 かゝるわざは 尼君詞
 むかしも 浮ふね詞
 思のほかに 浮ふね心
 おい人どもは 尼君達
 いらふべきかたも 浮ふね心

われかくて 浮ふね歌
 おやいかに 母北方
 わかき人の 地
 思ひたへこもるは 思堪
 かやうの人に 浮ふね心
 たい侍従 地
 こもきとて 女の童の心なり
 この御方に 浮ふね
 みめも心ざまも 浮ふね心
 かくのみ人に 地
 みいだして 浮ふね
 玄のびやかにおはせし人の 句の事
 これもいと心ぼそき 地
 きみも同じ 中將
 うちながめて 中將
 年頃のつもり 尼君詞
 心のうち 中將
 過にしかたの 詞
 山ごもりの 尼君詞
 人々に 地

君にも 中將
 いふがひなく 尼君心
 人よりも 尼の女
 この君の 中將
 ひめ君は 浮心
 御まへなる人々 浮の
 あないみじや 浮心
 まらうと 中將
 少將といひし人 少將尼なり
 むかしみし人々は 中將詞
 つかうまつりなれにし人にて 少將尼
 かのらうの 中將詞
 姫君 浮ふね 少將尼心
 過にし御ことを 少將尼詞
 御ことを 尼君の女の事
 おぼえぬ人を 浮ふねの事
 うちとけ給へる 浮の
 かゝることこそ 中將心
 なに人ならん 詞
 そのまゝにも 少將尼

うちつけに
 人のものいひを 尼君詞
 藤中なごん 誰ともなし
 心うく 尼君詞
 物をのみ 浮の
 いと泪ぐみて 浮
 へだてきこゆる 詞
 げに何心なく 尼君心
 せんじの君 中將の兄弟なり
 小野に立よりて 中將詞
 世をすてたれど 尼君の事
 この春 詞
 まうでて 尼君の
 衰なりけること哉 中將君
 忍びたるさまに 中將君
 わづらはしけれど 尼君心
 忘れわび侍りて 詞 女の事
 うちつけ心 中將詞
 あだしの、 中將歌
 この御かへり 尼君詞

いとあやしき手をば 浮詞
 はしたなき 尼君詞
 聞えさせつるやうに 文の詞
 うつしうゑて 尼君
 こたみは 中將心
 例のおま 少將君
 いらへ給ふべくもあらねば 浮の
 たいめし給へるにも 中將尼君に
 心ちよげならぬ 尼君詞
 いらりても 尼君浮の方へ
 なすけなし 詞
 人にもものきこゆらんかたも 浮詞
 まらうどは 中將
 いづらあな 詞
 松むしの 中將
 あないと 尼君詞
 さやうに 浮心
 あま君 地
 秋の野の 尼君
 うちにも 浮心

をとこ君をも 中將の事
 人々なれば 尼達なり
 かくはかなき 尼達の詞
 よのつねなるすぢには 夫婦のかたらひなくともとの
 心なり
 さすがに 地
 かぎりなく 浮心
 中將は 地
 過にし 中將心
 尼君など 詞
 なにか 中將詞
 いととおぼえて 尼君詞
 ふかき夜の 尼君
 きこえ給 浮の
 心ときめきして
 山のはに 中將
 ねやのいたまも音しありやと 思ひ合はぬを云
 なかく、 地
 いでて 大尼詞
 くそたち 女の童の名なり

それなんめりと 中將心
 さだめなき世ぞ 大尼八十餘り中將の妻若く死たるを
 云
 いづらさらばと 中將詞
 昔き侍りし 尼君詞
 ひく 琴を
 いまやうは 中將心
 いやくめでられて 大尼心
 おうなは 詞
 あづまごと 和琴
 こともなくひき侍りしかど 難無引
 いと亥のびやかに 中將
 いとあやしき事を 詞
 いとよしと思ひて 大尼心
 詞
 いでとのもりのくぞ 童の名
 とりよせて 大尼
 いとをかしう 中將尼
 みえほのく 大尼
 いまやうの 詞
 姫君 尼

かへり給をも つとめて よべは わすられぬ いと めづらしからぬ 萩の葉に とくなし かくるに いざ給へ 夫は君 ものおぢは はかなくて 二本は むねつぶれて ふる川の 玄のびてと おはさんを 左衛門とて ながめ出で	中將 文の詞 中將 尼君心 中將心 浮心 尼に 尼君心浮の事 尼君詞 浮心 尼君心 浮 尼君 長谷へ 浮の 女ばうなり 尼の	あさましき おもふ人ひとり 御らんせよと きゝも入給はず くるしきまでも いとあやしう はんとりにやりて せんせさせ奉り また手なほして あまうへとう きせい さたすぎたるあまびたいの 時々はれくしう 思ひ出る事多くて 心には あなうたて さも餘りにも いとほしたなく おはせぬよし 一所など	浮心 句の事 少將尼詞 浮 少將尼詞 浮詞 少將尼 浮に 少將まげて手をなほすなり 少將尼詞 恭聖 浮心 少將尼詞 浮心 少將尼詞 浮 少將尼詞 浮心 少將尼君 浮の
---	--	---	--

いとことおほくうらみて 御聲も 山里の あまぎみ うき物と わざと きゝつたへ いと哀れと この人々を 例はかりそめ おい人 かゝる所に こまやかなることは たいまじり聞え 姫君は おい人の よひまどひ ひとつ橋 しおもへばあからめせず こもき	中將 詞 中將 少將尼詞 浮 浮物 少將尼 中將心 少將尼左衛門 浮の 大尼 中將 少將尼左衛門など 尼君の 大尼 大尼 六帖「津の國のなにはの浦のひとつ橋君を 女の童の名なり	いとなさけなく あま君 この君の あやし さらにない 鬼のとりもて おやときこえけん人 たゝすぎ 思ひさだめし人 宮も たゝこの人の うすきながらも きゝつけられ ともにてわたるべき人 いびきの人 おまへにとく まかなひも まかひていふも など俄に 法師詞 一品宮	少將尼左衛門など詞 大君 浮 大尼詞 浮心 八宮の事 三條の小家の事 薫 句の 薫の事 老人なり 老人詞 浮心 老人 大尼の人詞 女一
---	---	--	--

左大臣 夕

きさいの宮 中宮

はづかしくとも 浮心

あまになし給ひてよと 僧都に

心ちのいと 詞

ほれなくしう 法師

れいのかたに 浮心

丸なるかしら 法師どもなり

いとおそろしき 浮心

母の御かたに 僧都

いかにぞ 詞

東の御方は 尼君の事

このおはせし人は 浮

玄かこゝに 内の人詞

こゝち悪しと 浮の

たちて 僧都

つゝましけれど 浮心

ふいにて 僧都詞

世中に 浮詞

まだいに行くさき 僧都詞

をさなく侍しほどより 浮詞

あやしうかゝる 僧都心

かの宮に 中宮

かのあま君 浮心

みだり心ちの 詞

ひじり心に 僧都心

夜やふけ侍ぬらん 詞

いとうれしくおりぬ 浮心

いづら大とこたち 僧都詞

みつけ奉し二人 浮を

げにいみじかりし人の あざり詞

御かみを 浮の

玄ばしは あざり

かゝるほど 地

わが御うへの 僧都のけさなり

おやの御かたを 僧都詞

いづかたとも 浮心

あなあさましや 少將尼詞

うへかへりおはしては 尼君の事

かばかりに 僧都

昔より 中宮詞

世の中 僧都詞

けうの事 希代の事となり

げにいとめづらかなる事 中宮詞

大將のかたらひ給ふ宰相 薫

いかでさる所 小宰相詞

玄らすさもや 僧都詞

その頃 中宮心

この御まへなる人も 宰相心

あね君の 中

かゝる人 詞

宮は 中宮

大將 薫

この人 宰相

姫君も 女一

かしこに 小野

いみじく 尼君

いまはたゞ 僧都詞

いとほづかしく 浮心

御ほうふく 僧都心

よりてさまたげす 少將尼

たちはてゝしものをと 浮心

のどやかに あざり詞

かゝる御かたちやつし給ひて 僧都詞

とみに 浮心

なほたゞ今 浮心

いとあへなし 中將心

例ならず 浮

とりて 文を

かきうつして 浮詞

中々かきそこなひ 少將尼詞

めづらしきにも 中將心

物まうでの人 尼君

かゝる身にては 詞

まことのおやの 浮心

いともの 尼君詞

いとおぼえず 人々詞

一品宮 女一

とみにも 僧都

同じ御帳に 中宮と僧都

思やうにも 浮心
 おはしたる人も 僧都
 哀山ふし 詞
 我も今は 浮心
 からぎぬ姿 中將
 かひなきことも 中將心
 いとまありて 詞
 いふがひなき人の 浮の
 ிரりて見るに 少將尼
 ことつ人にも 浮
 いとかくは 中將心
 ありけんや 今まで有りしやなり
 よのつね 詞
 いと行末 尼君詞
 中將心
 このあま君も 浮ふねを云
 行末 詞
 たづね聞し 浮を
 人にまらるべき 尼君詞
 こなたにも 浮
 いひつたふ 尼君

はらからと 詞
 心ふかゝらん 浮詞
 されば 地
 としもかへりぬ 薫廿五歳
 春の 浮心
 の給ひし人は 籠 句
 おろそかなるこに
 こなたにも 浮
 ねやのつま近き 浮心
 あかざりし 地
 ぼけくしき 大尼
 こなたにきて 尼君の事なり
 いとこよなく 紀守詞
 ひがみ給ひにければ 大尼の
 常陸の北の方 浮の繼父
 いもうとなる 紀守が
 とし月 尼君詞
 わがおやの 浮心
 まかりのぼりて 紀守詞
 右大將 薫

故宮 八宮
 一所は 大君の事
 その御おとうと 浮の事
 いかでか哀ならざらん 浮心
 かのひじりの 詞
 兵部卿のみや 句
 北のかた 中
 紀守詞
 この大將 薫
 おとりばらなる人 浮
 はじめのかた 大君の事
 ほどく 殆
 すけも 出家も
 かのわたりの 浮心
 あやしく 紀守詞
 やうの物 同様
 水をのぞき 薫の
 の給ふことは 薫の
 一の所も 攝政を云
 たゞこの殿を 薫
 ことにふかき心も 浮心

ひかる君と 詞
 故院 源氏
 この御ぞう 族
 左のおほむどの 夕
 それは 紀守詞
 玄らとく 執徳
 兵部卿 尼君詞
 女にて 紀守詞
 哀にも 浮心
 とゞこほる事なく 紀守
 わすれ給はぬは 浮心
 かの人の 紀守
 これ御らんじ 尼君詞
 うたて 浮心
 あま衣かはれる身にや
 いとほしく 浮心
 すぎにし 詞
 さりともおぼし 尼君詞
 玄かあつかひきこえ給ひけんひと 浮の母をさす
 かくなくなして 尼君の女の事

みしほどまでは 浮詞
 ひとりば 母の事
 大將は 薫
 このはてのわざなど 浮のとぶらひの事
 はかなくも 薫心
 ひたちの事ども 浮のまゝ父
 かうぶり 元服なり
 殿人に 六位なり
 後の宮に 中宮
 あやしき山里 薫詞
 かのことおほし出て 中宮心
 そこには 詞
 かの人ば 浮
 なほうちつゝきたるを 大君と浮ふね
 さも侍らん 詞
 なほかく忍ぶるすちを 中宮心
 宮の 句
 小宰相に 中宮詞
 大將 薫
 かの人 浮

君ぞ 宰相を云なり
 御まへだに 宰相詞
 さまぐなることにこそ
 心えて 宰相心
 立よりて 薫
 いひ出たり 宰相
 めづらかに 薫心
 宮のとはせ給ひしも 中宮
 なぬあやしと 薫詞
 その人は 浮ふね
 かの僧都の 宰相詞
 所もかはらず 薫心
 思ひいりにけん 浮ふねの
 さなの給ひそなど 句の
 聞えおき給ひければ 中宮に
 宮も 句
 大宮に 中宮
 あさましう 薫詞
 心と 浮の
 宮の御ことを 句

かのこと 浮の事 薫詞
 聞つけ給へしは 句の
 そうづのかたりしに 中宮詞
 宮は 句
 きこえん 句
 いとおもき御心なれば 薫心 中宮の
 すむらん山里は 浮の
 せうとのわらは 浮の
 うちみん夢の 浮の弟を見たらばの心なり
 さすがに 薫の
 その人とは 浮
 かたちことなる人の 尼達を云

【此本といふがし新釋にはあらざるべしこは素本の心付などある刊行をそのまゝ書きたるにや千陰本をかりえたれど闕本と見えて此冊は書寫の本也其まゝ刊本のまゝをうつせる成るべし新釋の如き注見えすそは千陰本も心付ある刊行の素本なりしをもておもへりなほ田安御本を得てたすべし暫く其まゝうつし置ぬと嘉郷いふ】

源氏物語新釋

夢のうきはし

細此卷の名は手習ひの君は宇治にて身をなげつるものを今おもほえずも小野にながらへてあるはたゞ夢とこそいふべければ此短き一卷の中に夢の心地してなどいふ事五所まであり然れば此意にてつけたるなりうきはしてふ詞はうきたる夢のよしにてそへたるのみさて或説に「世中は夢のわたりの浮はしか打わたしつゝ物をこそ思へてふ歌よりいへるかといへど此歌何に出しや去らねばおきていさゝか後の物ながらさ衣に「はかなしや夢のわたりの浮はしをたのむ心はたえもはてぬにてふあるをおもふに此詞はやくより歌などにもいひしをもて書ける成るべしさて此物語筆本より初てはかなきことを卷の名とせし多かる中に紫の過給ひ光源氏のことをもかきはてたる卷をまぼろしといひ薫大將浮舟の君のこと書けるはてをかく名づけしは常なきよの中のさまを思へるものといへるはさることなりされどこれらのことにつけて或説どもに人の國のふみどもをあまた引きあはせ

ていへるは例のわざなりあながちにもとむる時は似たることも有るものぞ
山におはしまして 上の卷の末に引きつゞけてかけり
薫比えの山になり
よかはに 横川
とし頃も 薫の僧都をたのまるゝなり
一品宮 女 上の卷にあり
今すこし 後世のことなるべし
御ゆつけなど 僧都のまゐらせらるゝなり
をのゝわたりに 薫の向給ふ
玄か侍る 僧都の答
くちあまの 老くちたるなり
そのわたりに 薫詞 夕霧のかよひ給ひしみやす所の
住給ひしかとになればなり
人おほうすみ侍ける 御息所と落葉宮のおはせし事なり
今はいとかすかに 今は小野にさやうの人もなくなり
たるとなり
たしかにてこそは たしかに聞てこそはいかなる様に
て住ぞなどともいひやり侍らめとなり

思給ふるほどに はやくより聞給ひつる程にの給ふなり
御でしになりていむことき侍るはまことか おにこもれりときくはまことかてふ語にてかけり
こゝにうしなひ 薫の
たしかに聞給へる 是よりおもひめぐらすなり
心え給ひて 手習のそこに有と
いかなりける 僧都の申給ふ
おやしと思ひ 手習の事なり
らうけ 或説所勞の事を勞氣といふべしといへり又みだりやまひともしへば亂氣か
むかひたりしに 宇治へ
たまどの 萬葉二に玉床といへると心は同じくてこゝは魂殿なりさて既に死て玉どのに置きしが生出でし昔物語の有るを以ていふかなくともあひなん
何がしは 暫よみ切
をしむべきよはひ 母のよはひをいふ
其人の 浮舟
てんぐう 或説に天狗は星の名なり此國にててんぐうといふは天魔の類なりと今思ふに高つ鳥のわざはひ

といへるも此ものなるべし
京にゐて奉りて その時京をへて小野に來し故に京といふか若又京は歌といふ字の誤りか
かのさかもとに 小野なり
みづからおり侍りて 僧都
ごまんなど 護方加持などなり
法しにては 吾法しの道なれば此方よりもすゝめんことをとてなり
出家
すけせしめ奉りてし 出家せしめ奉りたりしなり此てはたりの反なり或説に助ことばなりといふは誤れりさてこそあなれとほのぎきて 如是してこそ浮舟はあるなれと小宰相の語りしをほのく聞て今かくまで
さだかに問出し給へどとなり
さば さらばなり
あるにこそ いくてあるなり
もてなし給へど といめあへ給はずてふ様の語を略かく覺しける 僧都の心に薫のおぼしけることを思ふなり
なまわかんどほり 薫王家統流
こゝにもとより 孟薫の我身をさしての詞なり

わざと思ひし きて妻など思ひつるにはあらずなり
 又いとかくまでおちあふるべき 態とはもてなきねど
 又流浪^{ウラウラ}までには見はなだざりしとなり
 つみかろめて 尼となりたるをいふ
 みづからは 薫のみづからはなり
 つきごろかくさせ給 かの尼君のむすめと思ひて
 かなしみにたへで 堪こらへずてなり
 とむらひ 其母の小野へ
 おり給へ 僧都の我を誘て下り給へとなり
 あはれとおもひ給へれば 僧都の薫のけしきをいふ
 かみひげをそりたる法したに 萬十六の戯歌にほうし
 らがひげのそりくひといへり
 女の御身と 女は心よわくてもとの心をはなれかぬる
 物なればなり
 あぢきなく 僧都のさまへおもふなり
 月たちて 來ん月のはじめの頃といふなりかくいふは
 かの罪得ぬべきかたなればわがいざなはん物にあら
 ずと思ふ故にのがるゝなり
 御せうそこを こなたよりなり
 いと心もとなければど 薫

さらばとて 玄かあらばとて
 かのせうとのわらは 浮舟の兄弟
 よび出給て 薫の前に呼てさて僧都にの給ふ
 これをかつがつ物せん 此わらはをやりていさゝか玄
 るべせんとなり
 御ふみ 僧都の
 その人とは ゆかりある人ともなくてなり
 何がし 僧都の返答なり
 此玄るべにて 出家したる人なり手習の尼の戒を破る
 のみならず僧都も破戒の媒するに成ぬべし既にこと
 の有様は申せしことなれば此上は御みづからよろづ
 ものし給へどなり
 ことの有さまは 前の如く
 うちわらひて 薫
 又えさらぬことも みかどの御聲に成りし事
 すぐせと 世をばすぐせども
 さも侍らめ 心になひがたくて過さめなり
 さしては 玄かあらではなり
 ふかゝりしかたの 佛道に
 中やどりも 小野のやどは

うはのそら 玄るべもなくてなり
 ものしたらん 問なり
 これにつけてほのめかし 思ふに此童をめぐるのみに
 はあらず薫のつみをかすまじきよしをも給へば僧
 都のうたがはで書きしならん
 すゝなる かの尼君のむすめと思ふ手習は我弟子な
 ればふかきゆかり有となり
 このこは 小君の心なり
 心もえねど 子細をば玄らねどもなり
 すこしたちあがれ 少退散^{セツサン}てなり
 あをば山 紀にも萬にも青葉の山といふ語有るが皆葉
 のまげくあるをいふ名所と思ふは誤りなり
 やりみづのはたる 宇治にて見給ひしなどいふ説如何
 むかし覺ゆる 宇治川の螢ぞといへば又手習は宇治に
 て夏を過せし事なしてふ説もあり然れども宇治なら
 でいかなる所の螢をむかし覺ゆといはんにや記者の
 思ひめぐらさで書きしにやさる類もすくなからぬ也
 れいのはるかに 前の中將のおはせしを例のといふ
 谷の軒端より 谷の岨^{ササ}なるべし谷の軒ばてふは理なし
 ともしたる火 たいまつなり

のどかならぬ そば道のほどなれば火どものあがりさ
 がるさまならん
 あなたへ 僧都へなり
 ひきぼし かけろふの日記にみかのひきぼしといへり
 うつぼにひ色のをしき四つしてひきぼしくだもの云
 々其外にもあり
 時にかゝる 宇治をいふ
 いと此世とほく かくいふを手習の聞玄るなり
 いまは何にすべき 尼の身にて
 あみだ佛 唱へ給へるなり
 このわたりには 前の卷に此ことくはしくありよ川へ
 のちか道なるべし
 やがてやらんと 横川よりかへり給ふ使に
 ひとめおほくて 御供の人々をいふ
 むかしもつねに かの宇治にて匂の便見とりし人成る
 べし
 人きかぬまに 童を
 あこがうせにし 吾子とは玄たしみていふ詞なり
 いもうと 姉にても男の兄弟よりは妹といふこと既に
 いひつ

ものし給 いくてあるてふを略

をよとあらゝかに すべてこたへするには平々といふ
なれどこゝはなかとする口つきにていへばあらゝ
かなるなり

かへりておかし侍てなん 法師の道といへどこれは今
少しはやまりたれば臆したりとなん

こなたへ 手習へなり

物がくし 尼君の間に前々つれなくかくせしなり

かやうにてはさふらふまじくこそ 手習にまたしけれ

ばすのうちに入るべきよしのたまひしとなり

かやうにて 小君のいふ

あらじなど 手習のこなたの文にてはあらじともい

んよしなきなり

かへりては佛のせめそふべきことなるを そむきてか

くなり給ふは中々佛のうけ給はぬ事となり

あいさうのつみ 愛執の罪

一日のすけのくどく 或云心地観經に一日一夜出家修

道三百萬劫不墮惡趣

すこしとさまに 上にいよく引いりしとあり

ことごとく 委なり

此子は今ほと 浮舟の卷に例はことに思ひ出ぬはらか

らの見にくやかなるも戀しと有りしなり

さがなく 紀に不祥をさがなし体祥をよきさがと訓た

ればさがなくは悪しきといふ意になる

いとおかしげにて 尼君などこれを見て思ふなり

何かいまは 手習心

思はざらん 小君も

おもがかりして 尼になり給へばなり

げにへだてなりとも 手習詞

あさましかりけん 宇治にて魂けとられしさまなり

きのかみとかありし人の 前の卷に在しこと

みくあたりの 薫の宇治におはしてわが周忌とぶらひ

給ひしことなり

そのうちとさまかうさま 紀伊守の物がたりにつけて

たゞひとり 母北方なり

いかでかとおろかならず 手習をいかでよろしくもと

願ひ給ひしとなり

かの人もし世に 母なり

さはきつれど 姉君のおはすとはなり

いかで奉らん 小君の尼君などいふなり

尼君など そゝやあなうつくしといひて それよくといふ語な

りうつくしとは萬に愛の字を用ゆ爰はまたをさなき

子のふしめになりてわびしげにすればあはれと思ひ

ていふ語なり

けさうの人 少將尼など誰人よりときかまほしうて小

君に問ふなり

おぼしへだて、 小君のいふ

人づてならで 手習のちかに

いかで奉らん たゞちに

いとことわり 尼君の詞なり

うたてなおはせそ あまりに別様になり

おしよせ奉りたれば 手習を

こと人には 小君のみて形はかはりたれどこと人には

あらず手習なりと去りて

ありしなからの 手ならひの見給ふにもとのまゝの薫

の御手なり

ほのかに見て 少將の尼など

例の 記者の語

ものめでの 少將右衛門などいふ人々

さらに聞えんかたなく 薫の御文の詞

さまざまにつみおもき御心を 匂宮にあひ母をおきて

身をあやまち又一度出家せしも皆僧都の給ふにゆ

るし爰がひてもとのちぎりにかへり給へとなり上

に僧都の文あり引合せて見るべし或説のごとくにて

はゆるしての語叶はず

いまはいかで 其世のとは思はず今はひとへとな

り

われながら かくおもひいぞくは今更に我身ながらい

かにぞやおもはるゝをまして人はいかにをこにやみ

ん夫もおもひあへずとなり

かきもやり給はず 書きもつくし給はぬといふなり

のりのしと 法の道を間行くその師を中々にかゝる方

のゑるべにしてふかきおもひにまどふとなり

この人は 小君なり

其人にも 尼となりて

みつけれ 薫に

みわづらひぬ 尼君

こゝちのかきみだる 手習

いとうたてきにくく 手習

あるじぞ 尼君なり

みたてまつり かねてより

かくいとあはれに 薫の

ひごろもこゝち 手習は

わざと奉れさせ 小君のいふ薫の御文

げになどいひて 尼の

雲のはるかに こゝは横川などのごとくおく山ならぬ

なり

山風ふくとも 一本山ふかくともあれど意たがひて聞

ゆ

すゝろに 小君の心

ゆかしき 浮舟の

いつしかと 薫なり

おとし置給へりし 宇治に捨置給へる薫の心ながさの

習に人もとりかへして爰におとし置しにやとなりお

としは捨るに同じ

ならひにとぞ 一本此二言なしとぞといふは例の事な

れどならひにとぞといふては聊事ゆかぬなりなきを

よしとすべきか

これはやくより仰ごとたうべつればとし月にまゐる
しもてきて寶曆八のとしの四月をいつそまり四の卷
までおはりつそれが中にやんごとなき御おぼしのこ
とを書けるも多かれどわざとあらはしゑるし侍らす
こと物にはそのよし書けるもあり

賀 茂 眞 淵

明治三十九年三月廿五日印刷
明治三十九年三月三十日發行

(賀茂眞淵全集第五)

編輯者 國學院編輯部

校訂者 賀茂百樹

發行者 吉川半七

合資 吉川弘文館代表者

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

印刷者 本間季男

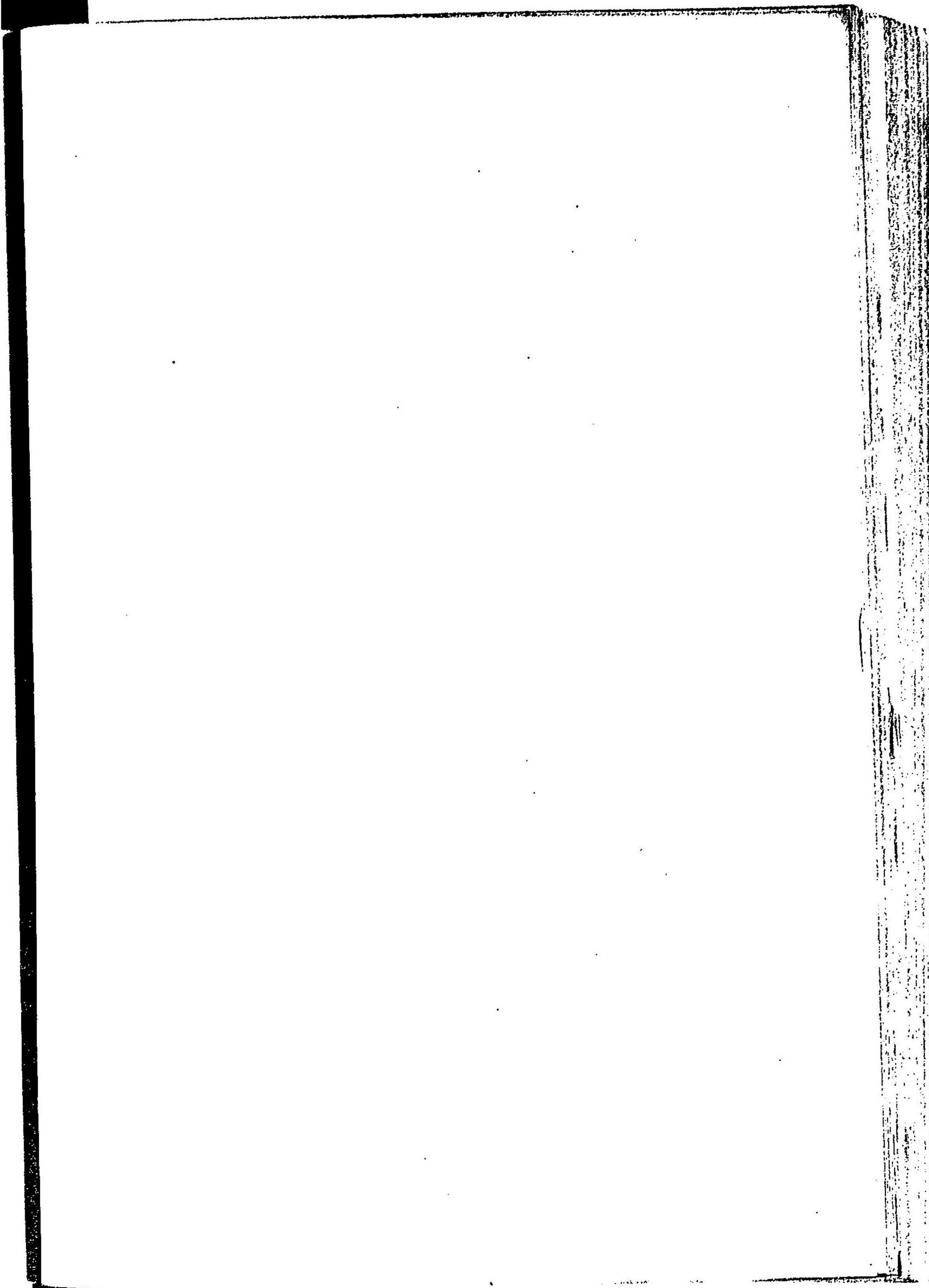
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

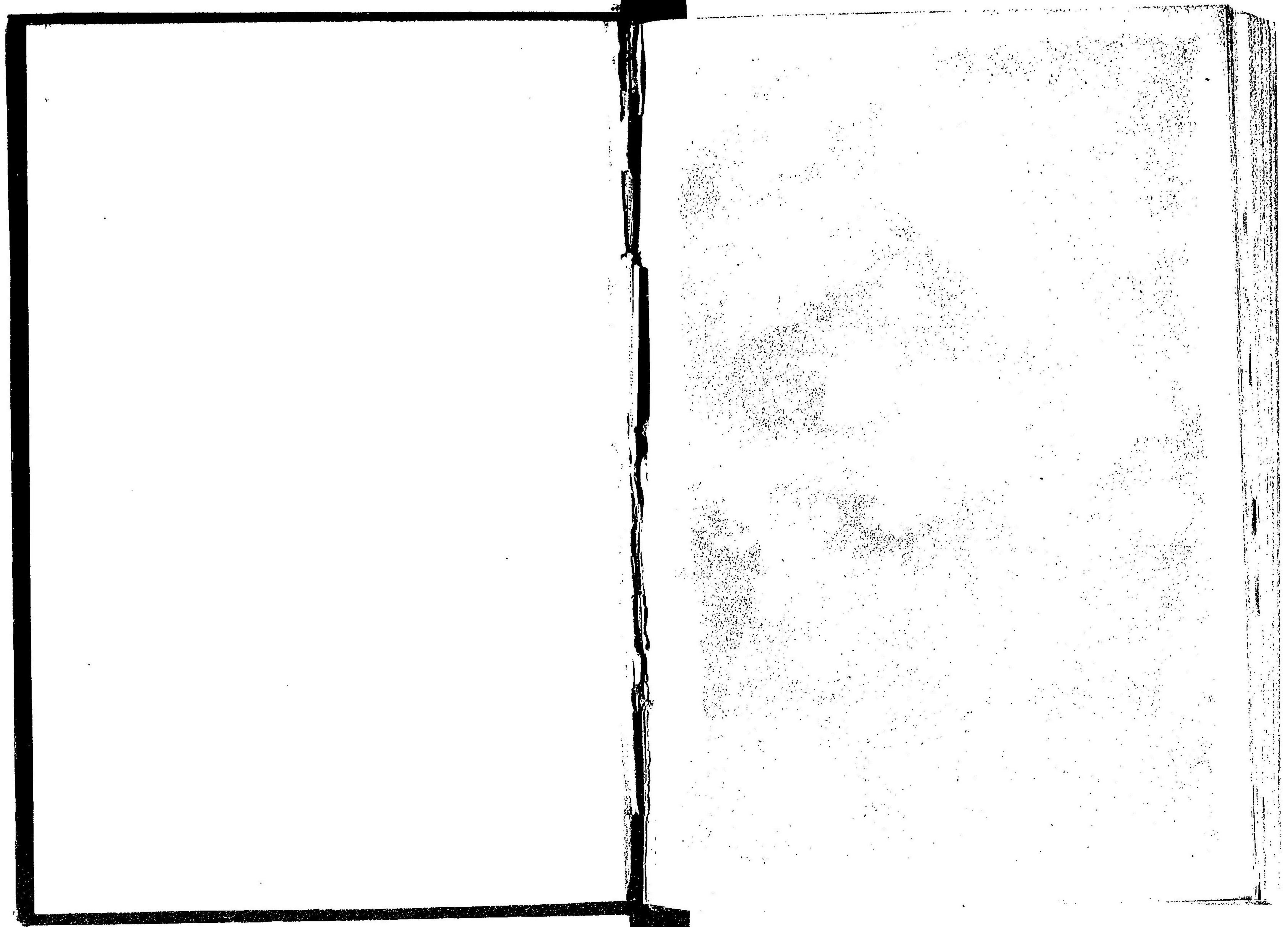
發行所 合資 吉川弘文館

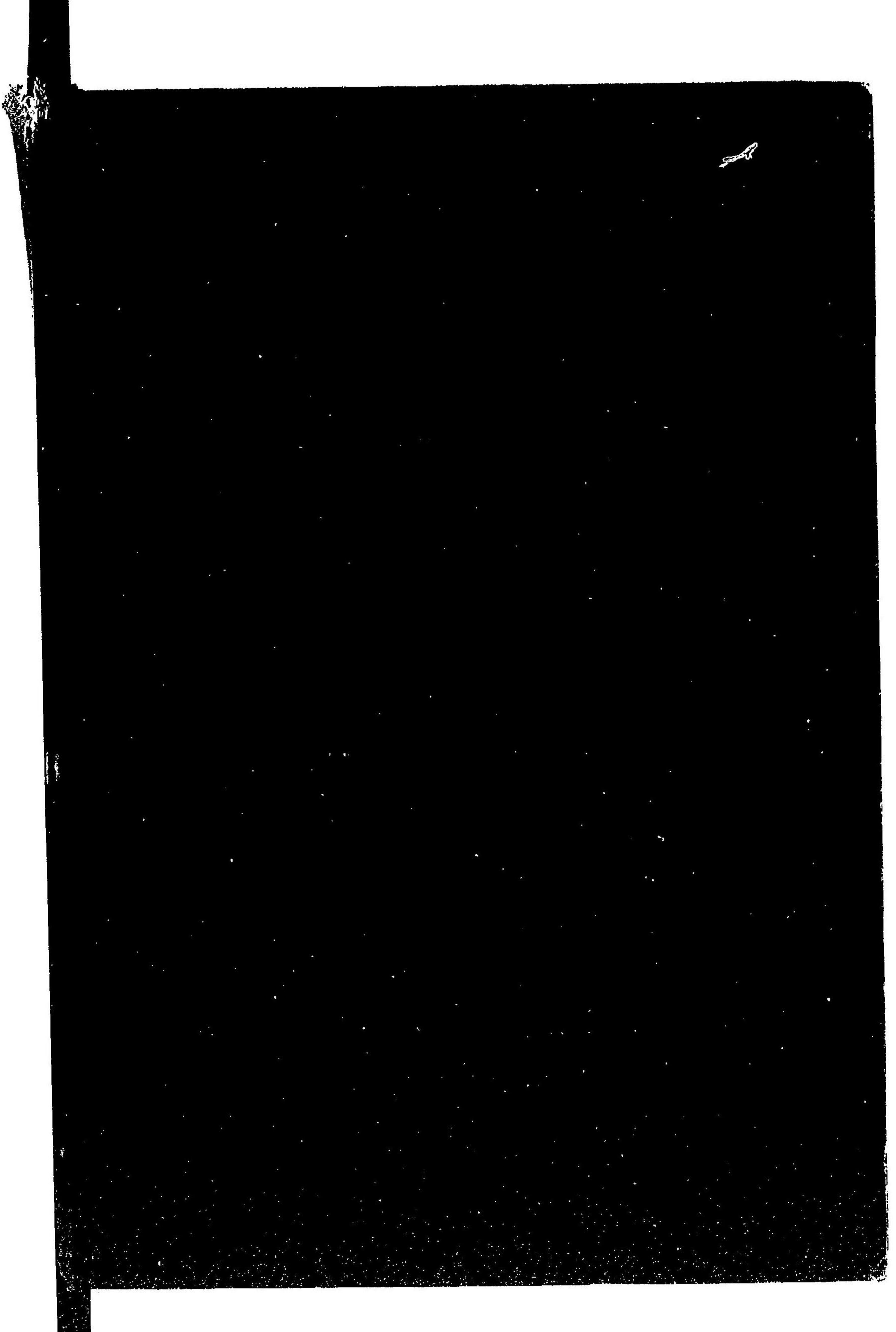
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

著作權所有

10







(M)

R

